

RIDER TIME 仮面ライダー
龍騎 with 仮面ライダー
フォーム

ロンギヌス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

閉ざされたはずの鏡の世界で、戦いは再び始まった。

戦え、仮面ライダー達よ。

戦わなければ生き残れない！

※仮面ライダージオオウのスピノフ作品『RIDER TIME 仮面ライダー龍騎』の物語に仮面ライダーファムを投入した作品です。

※一部、『リリカル龍騎ライダーズ in ミッドチルダ』の設定も踏襲しています。それ

でも構わないという方はぜひどうぞ。

※もちろん、ジオウ勢も登場します。

目次

登場人物設定

プロローグ

Adventure

Again

1

|

25

Adventure

Again

2

|

37

Adventure

Again

3

|

55

Adventure

Again

4

|

72

Adventure

Again

5

|

92

Adventure

Again

6

|

106

Another

Alternative

e l

Another

Alternative

e 2

145

126

1

11

25

37

55

72

92

106

登場人物設定

白鳥夏希しらとりなつき（霧島美穂きりしまみほ）／仮面ライダーファム

E FINAL』における主人公の1人で、劇場版『EPISODE
E FINAL』における主要人物。

かつては結婚詐欺師で、浅倉に殺された姉の蘇生と、浅倉への復讐を目的に戦っていた。また、真司に想いを寄せている一面もあった。

今作では過去の記憶を失っており、二宮と行動を共にしている。

記憶がない状態で殺し合いをさせられているのもあつてか、精神的に脆く、他者からの愛情に飢えている。自分の傍にいてくれている二宮とは、互いに想いを寄せ合っている。

二宮銳介にのみやえいすけ／仮面ライダーアビス

仮面ライダーアビスの変身者。本作における主人公の1人。

かつては高見沢グループに所属していたが、ある一件から高見沢逸郎たかみさわいつろう／仮面ライダーベルデと深い関わりを持ち、自分が生き残る為なら手段を選ばない冷血漢と化した。

今作では過去の記憶を失っており、夏希と行動を共にしている。

過去の記憶がない為、人としての優しさは少なからず持ち合わせており、夏希とは不器用ながらも互いに想いを寄せ合っている。

城戸真司／仮面ライダー龍騎

仮面ライダー龍騎の変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』における主人公の1人。

かつてはOREジャーナルの見習い記者で、ある出来事から龍騎となり、ライダー同士の戦いを止める為に動いていた。お人好しな性格で、周りからは良くも悪くも「馬鹿」と称されている。

今作では過去の記憶を失っており、手塚、木村、石田とチームを組んで行動している。相手の言葉を疑わずに信用するなど、お人好しな一面は相変わらず。

秋山蓮／仮面ライダーナイト

仮面ライダーナイトの変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』における主人公の1人。

かつては意識不明となった恋人の小川恵里を救う為に戦っていた。普段は冷徹だが、根は優しく正義感がとても強い人物。

今作では過去の記憶を失っており、他のライダーとは組まず単独で行動している。

浅倉威／仮面ライダー王蛇あさくらたけし おうじや

仮面ライダー王蛇の変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』における主要人物の1人。かつては「イライラする」という理由だけで多くの傷害事件を起こしていた凶悪殺人犯。その凶暴性を神崎士郎に見込まれ、彼から授かったカードデッキで王蛇となり、ライダー同士の戦いに身を投じていた。

今作では他のライダー達と違い、過去の記憶をそのまま保持している。
今回のゲームでも真つ先に変身するなど、その凶暴性は微塵も変わっていない。

由良五郎／仮面ライダーゾルダゆらごろう

仮面ライダーゾルダの変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』における主要人物の1人。かつては弁護士である北岡秀一きたおかしゅういち／仮面ライダーゾルダの秘書を務めていたが、北岡が病死した後は自らがゾルダとなり、因縁の相手である王蛇に立ち向かった。

今作では過去の記憶がおかしくなったのか、北岡ではなく浅倉を先生だと認識している。

その為、自ら浅倉に尽くす事を志願し、彼の手下として活動する事に。

手塚海之／仮面ライダーライア

仮面ライダーライアの変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』で戦いに参加していたライダーの1人。

かつては占い師として、破滅に向かうライダー達の運命を変える為に行動していた。同じ目的の為に動いていた真司とは共闘する機会も多く、時には彼の運命を変える為に奮闘した事もあった。

今作では過去の記憶を失っており、真司、木村、石田とチームを組んで行動している。彼が率先して動いた事でチームが1つに纏まった為、仲間達からも強く信頼されている。

芝浦淳／仮面ライダーガイ

仮面ライダーガイの変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』で戦いに参加していたライダーの1人。

かつては大学のゲームサークル「マトリックス」の部員で、戦いをゲームとして楽しんでいた危険人物。自信家な性格で、人の心を支配して操る事に快楽を見出している残忍な男。

今作では過去の記憶を失っており、石橋、戸塚とチームを組んで行動している。

人の命を顧みない残忍さは今回も相変わらずな様子。

木村大地／仮面ライダーベルデきむらだいち

仮面ライダーベルデの変身者。かつて繰り返されていたライダー同士の戦いに参加していた。

落ち着いた雰囲気のある青年。ライダー同士が手を組む事を「一時しのぎ」と見なしている現実主義者だが、緊急時は味方を率先して助けに動くなど、良識的な一面も持ち合わせている。

過去の記憶を失っており、真司、手塚、石田とチームを組んで行動している。

石田諒／仮面ライダーインペラーいしだりょう

仮面ライダーインペラーの変身者。かつて繰り返されていたライダー同士の戦いに参加していた。

眼鏡をかけた青年。良く言えば慎重派、悪く言えば臆病な性格。率先してチームをついに纏めてくれた手塚に信頼を寄せており、彼に依存している節がある。

過去の記憶を失っており、真司、手塚、木村とチームを組んで行動している。

石橋健太郎／仮面ライダーシザース

仮面ライダーシザースの変身者。かつて繰り返されていたライダー同士の戦いに参加していた。

スカジャンを着た不良風の青年。強い者に付き従い、人をいたぶる事に快感を見出している小悪党な性格。

今作では過去の記憶を失っており、芝浦、戸塚とチームを組んで行動している。

戸塚健一／仮面ライダータイガ

仮面ライダータイガの変身者。かつて繰り返されていたライダー同士の戦いに参加していた。

坊主頭が特徴的な青年。基本的には寡黙でほとんど喋らないが、芝浦や石橋と同様、人をいたぶる事に躊躇いがない残忍な性格。

過去の記憶を失っており、芝浦、石橋とチームを組んで行動している。

岩高成二／仮面ライダーブレード

仮面ライダーブレードの変身者。かつて繰り返されていたライダー同士の戦いに参加していた。

赤いワイシャツに黒いジャケットを着た中年の男性。かつてのライダーとしての願いは不明。

過去の記憶を失っており、他のライダーとは組まず単独で行動している。

???? / 仮面ライダーリュウガ

仮面ライダーリュウガの変身者。劇場版『EPIISODE FINAL』に登場した謎の仮面ライダー。

姿は龍騎とそっくりだが、変身者の詳細は不明。

今作では、サラが始めたゲームでもその姿は確認できないが……？

???? / 仮面ライダーオーデイン

仮面ライダーオーデインの変身者。原典の『仮面ライダー龍騎』における神崎士郎の手駒だった存在。

かつてはタイムベントのカードを使い、ライダー同士の戦いを何度も繰り返ししていた。

今作では、サラが始めたゲームでもその姿は確認できないが……？

サラ

ミラーワールドにライダー達を集め、ライダー同士が殺し合うゲームを開催した謎の女性。

現実世界では、ある病院で昏睡状態に陥っているようだが……？

加納達也／アナザー龍騎

アナザー龍騎として活動する謎の男。ある人物からアナザーウォッチを授かり、ある目的の為に多くの人間を犠牲にする「ゲーム」を行っている。

サラとは何か関わりがある様子。

常磐ソウゴ／仮面ライダージオーウ

仮面ライダージオウに変身する少年。ウオズから授かったライドウオツチとジクウドライバーで仮面ライダージオウに変身し、最高最善の王になる事を目標としている。今作では、アナザー龍騎として暴走する達也を止めるべく奮闘する。

明光院^{みようちやういん}ゲイツ／仮面ライダーゲイツ

仮面ライダーゲイツに変身するレジスタンスの少年。最低最悪の魔王「オーマジオウ」に支配された最低最悪の未来を変える為、ツクヨミと共に現代の時間軸へとやって来た。

今作では、アナザー龍騎として暴走する達也を止めるべく奮闘する。

ツクヨミ

ゲイツと共に未来の時間軸からやって来たレジスタンスの少女。常磐ソウゴがオーマジオウにならないよう、彼を監視する為にゲイツと共にクジゴジ堂に居候している。今作では、アナザー龍騎として暴走する達也を止めるべく、ソウゴとゲイツをサポートする。

ウオズ／仮面ライダーウオズ

仮面ライダーウオズに変身する謎の預言者で、オーマジオウの家臣。逢魔降臨曆という本を所持しており、オーマジオウの君臨する未来にソウゴを導く事を目的としている。

今作では、ある理由からソウゴ達とは別行動を取っている。

プロローグ

「——またここか」

青くて広い空。

流れていく白い雲。

明るく照らされる日の光。

誰の姿も見当たらない大きな街。

女性がこの場所に立つのは、これが初めてではない。

「……は、どこなんだ……？」

彼女にとっては見慣れたこの光景。

彼女の疑問に答えてくれそうな者は、この場には誰もいない。

否、いないはずだった。

その疑問に答えてくれるかもしれない者が、この場には一人だけ存在していた。

「……………またお前か」

彼女の前に立っている、一人の男。

逆光で、その男の素顔は見えなかった。

「お前、誰なんだよ……………？」

この問いかけも、既に何度も繰り返している。

そのたびに、男は彼女にこう答えるのだ。

ただ一言……戦いをやめろ、と。

「何が言いたいんだ」

——ろ

「なあ、答えてくれよ」

——きろ

「お前、一体誰なんだよ……!!」

「——おい、起きろ白鳥!!」

「——ん、んう」

彼女の耳が、次に聞き取ったもの。それは眠る自分を起こそうとする、男の苛立った声だった。

「たく、やっと目が覚めたか」

「……んにゃ?」

その一言を耳にし、彼女——しらとりなつき「白鳥夏希」はようやく意識がハッキリしてきた。
「……あれ、もう朝？」

場所はとあるマンション、その一室。寝室のベッドからゆっくり体を起こした彼女は、近くの椅子に座り込んで黒いマグカップに口を付けている茶髪の男の姿に気付く。マグカップから漂ってくる香りで、彼が飲んでいる飲み物がコーヒーである事を彼女は理解した。

「ふああ……おはよう、二宮」

「さっさと眠気を覚ませ。これからまた外に出る予定だっただろ」

コーヒーを口にしていた男——にのみやえいすけ「二宮鋭介」は呆れた様子でそう言うてから、夏希の為に淹れてくれたと思われるコーヒー入りの白いマグカップを彼女に渡す。夏希は欠伸しながらもそのマグカップを受け取り、コーヒーを口に含んで顔をしかめた。

「うえ、苦つ……もつと砂糖多めにしてって昨日言つたじゃん」

「そういうお前はいちいち注文が多い……」

二宮は舌打ちしながらも椅子から立ち上がり、角砂糖の入ったシュガーポットをキッチンまで取りに行く。その間に夏希はコーヒーを一旦近くの小さな棚の上に置き、壁にかかっている鏡を見て自分の姿に気付いた。

「うーわ最悪。めっちゃはねてるし」

白いタンクトップに黒い下着のみという、あまりにも扇情的な格好をしている夏希。しかし夏希はそんな自分の格好よりも、寝癖がいくつも付いている自分の髪の毛の方に目が行っていた。寝癖直さなきやなあと思いつつも付いている自分の髪の毛の方に青色のズボンを手に取り、履き終えたちようど良いタイミングで二宮が戻って来た。

「ほらよ」

「ん、サンキュ」

二宮から受け取ったシュガーポットの蓋を取り、中からいくつもの角砂糖を摘まんで自分のコーヒーの中にぽちんと投入。それをスプーンで掻き混ぜた後、夏希は再びコーヒーを口にした。

「うん、美味い。やっぱコーヒーはこうでなくちゃ」

「入れ過ぎだお前の場合は。砂糖水飲んでる訳じゃあるまいし」

「良いじゃんか別に。そういうアンタこそ、砂糖もミルクも入れないでよくそんな苦いの飲めるよな」

「お前の味覚がお子様なだけだ」

「はいはい、どうせアタシはお子様ですよくだ」

そんな他愛のない軽口を叩き合いながら、2人はコーヒーを喉に流し込んでいく。そしてマグカップから口を離れた後……夏希の表情は真剣なものへと切り替わった。

「ねえ、今日で何日目だっけ」

「……今日で3日目だ」

二宮は寢室のカーテンを開け、朝特有の強い日差しをその身に浴びる。

「食糧もかなり少なくなってきた。また確保しに向かう必要がある」

「ん、わかった」

コーヒーを飲み干した二宮はキッチンへと戻り、夏希も同じくコーヒーを飲み終えてから棚の上に置く。それから近くの壁にかかっている時計に視線を向け、どこか不安そうな表情をその顔に浮かべた。

「そっか……もう3日目か」

朝の7時15分を示している時計。

その数字と針は、左右が反転していた。

「よし、誰もいないな」

それから数十分後。身支度を整え、マンションを出た2人は周囲を探りながら、とあるコンビニの前まで辿り着いていた。コンビニの窓から中を覗き込んだ二宮は、中に誰もいないのを確認し、近くの物陰に隠れていた夏希に合図を送る。それを見た夏希も二宮の後に続き、コンビニに入って食品コーナーまで移動する。

「OK、今日もたくさん置かれてる」

「早いところ詰め込むぞ。他の奴等に見つかる前にな」

二宮は手に持っていた手提げ袋を開き、そこに夏希が缶詰めを始めとする食品を順番に投げ入れていく。ある程度の量を手提げ袋に入れ終えた2人は、すぐにコンビニの出入り口まで向かう……前に、レジの前にやって来た夏希は自身の財布から数枚の千円札を引き抜き、レジの前に置いてから二宮と共にコンビニも後にする。

「お前も律儀な奴だな」

「こんな時だからでしょ。泥棒癖が付いちやったら後で困るし——」

「見つけたぞ」

コンビニを立ち去ろうとした2人の足を止めた声。振り向いた先に立っている人物の姿を見て、2人の表情に緊張が走った。

「こんな所にいたのか。それも2人も」

「ツ……」

赤いワイシャツの上に黒いジャケットを着た中年の男。彼の姿を見た夏希は焦燥の目を浮かべ、二宮はより鋭い目付きで中年の男を睨みつけた。

「戦え。それがここでのルールだろう？」

「二宮、アイツ……」

「……やるしかなさそうだ」

二宮は食糧の入った手提げ袋を置き、自身が着ている灰色の上着のポケットから、色のカードデッキを取り出す。それを見た中年の男もまた、黒いジャケットの懐から赤紫色のカードデッキを取り出した。

「……ああもうー」

夏希も観念した様子で頭を掻き、白い上着のポケットから白いカードデッキを取り出す。二宮と夏希、そして中年の男は向かい合った状態から、それぞれのカードデッキを正面に突き出した。

すると空中に銀色のベルトが3つ出現し、それらが自分達の腰に装着されたのを確認した3人は、それぞれ異なるポーズを取ってから、ある台詞を同時に言い放つ。それが、これから繰り広げられようとしている戦いの、始まりの号令だった。

「——変身!!」

カードデッキがベルトに装填され、3人の全身にいくつかの鏡像が重なっていく。それらが全て重なり合った時、彼等は異なる姿への「変身」を完了させた。

中年の男が変身した、鳳凰のような特徴を持つ戦士——「仮面ライダーブレード

”。

二宮が変身した、鮫のような特徴を持つ戦士——「仮面ライダーアビス」。

そして夏希が変身した、白鳥ハクチョウのような特徴を持つ戦士——「仮面ライダーフォーム

”。

3人は互いに睨み合う時間が数秒ほど続いた後……その場から同時に駆け出した。

「「はああああああああつ!!」」

全てが反転した鏡の世界——“ミラーワールド”。

閉ざされていたはずのこの世界で、“彼等”の戦いは再び始まった。

戦え、ライダー達よ。

戦わなければ生き残れない！

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Advent Again 1

「うわつとと……!!」

無人のコンビニ前で始まった、3人のライダーによる戦闘。攻撃を受けたファムが建物の壁に背を付け、そこに接近したブレードが刀剣型の召喚機——ほうおうしょうとう 鳳凰召刀ガルドバイザー——を振り下ろそうとする。しかしファムは横に動いた事で攻撃を回避し、追撃しようとしたブレードの背中を、アビスが左腕の召喚機——こうしょうほう 鯨召砲アビスバイザー——で思いきり殴りつける。

「ツ……はあ!!」

「チイ……!!」

すぐさまブレードが反撃の一撃を振るい、アビスは左腕のアビスバイザーで上手くガード。アビスが後方に素早く下がり、その隣にファムが並び立つ。現在、2人とブレードの間にはそれなりの距離が生まれていた。

「簡単にはやらせてくれねえか……」

「悪く思うな。私とてまだ死にたくはないんだ」

「それはこっちも一緒だつての……つと!!」

アビスは左腕のアビスバイザーを突き出し、水のエネルギー弾を連射。それをブレードがガルドバイザーで防御している隙にファムが動き出し、レイピア型の召喚機——
 “うしよけん羽召劍ブランバイザー”の装填口を開き、そこに1枚のカードを挿し込んで装填する。

《SWORD VENT》

「やあ!!」

「ぬっ……!!」

ブランバイザーをホルスターに納め、上空から飛来した薙刀のような武器——
 “ウイングストラッシャー”を掴み取ったファムはそのままブレードに斬りかかり、ブレードはそれをガルドバイザーで防御する。そこにアビスがさかさ蹴りかかり、後退したブレードにアビスとファムが2人がかりで攻撃を仕掛けるも、ブレードは後退しながらも2人の攻撃を的確にいなしながら、開いたガルドバイザーの装填口に1枚のカードを装填した。

《SWING VENT》

「ぬうあ!!」

「何……ぐあっ!?!」

「くっ!?!」

鳥の尾羽のような鞭——「ガルドウィップ」を手にしたブレードはそれを大きく振り回し、一撃を受けたアビスは大きく地面を転がり、ファムはウイングスラッシュで防ごうとしたが、ガルドウィップは彼女を攻撃するのではなく、ウイングスラッシュャーごと彼女の体を縛り付けた。

「しまっ……うわ!?!」

引つ張られたファムがその場に転倒。起き上がろうとしても、ブレードがガルドウィップを引つ張る事でまた体勢を崩される。このままファムの動きを封じようとするブレードだったが……

《SWORD VENT》

「むっ……!?!」

鮫の歯を模した長剣——「アビスセイバー」が回転しながら飛来し、ガルドウィップを切断。ファムが解放されると共に、飛んで来たアビスセイバーを右手でキャッチしたアビスがブレードに斬りかかり、ブレードの胸部に一閃を加えた。流石のブレードもこれは効いたのか、胸部を左手で押さえつつも跳躍し、2人から大きく距離を取った。

「ッ……やるようだな」

「お互いな」

ファムの体を縛っていたガルドウィップを引き千切り、放り捨てたアビスはアビスセ

イバーをブレードに向ける。立ち上がったファムもブランバイザーを抜き取り、ブレードも再度ガルドバイザーを構え直す。相手の出方を窺おうと、3人がジリジリと距離を縮めていこうとした……その時。

チユドオオオン!!

「ぬおっ!!」

「!?!」

突如、駆け出そうとしたブレードの足元が爆発を起こした。驚いたブレードの体勢が崩れ、ファムとアビスもそれに驚いて思わず足が止まる。そこに……

『ジュルルル!!』

「な……ぐあっ!!」

「うわっ!!」

2人の真横からクラゲのような怪物——“プロバジェル”が飛びかかって来た。不意を突かれたアビスとファムが攻撃を受ける中、そこへ更に違う姿の怪物達も次々と現れ始めた。

『キシヤアツ!!』

『グルルルル!!』

「ッ……騒ぎを聞きつけたか……!!」

『ブルアツ!!』

緑色の蜘蛛のような怪物—— “ソロスパイダー” が振り下ろして来た爪をかわし、突進して来た赤いイノシシのような怪物—— “ワイルドボーダー” を受け流したアビスは、プロバジエルを蹴りつけてブレードに押し付ける。プロバジエルの相手を押し付けられたブレードがプロバジエルと相対する中、シマウマのような怪物—— “ゼブラスカル・アイアン” を蹴り倒したファムはブランバイザーにカードを装填する。

《FINAL VENT》

「どうて、一宮!!」

「ッ……!!」

ファムの正面方向にいたアビスはすぐさま左に避け、ソロスパイダーとワイルドボーダー、ゼブラスカル・アイアンの3体がファムを睨む。するとモンスター達の後方から、1体のモンスターが猛スピードで飛んで来た。

『ピイイイイイッ!!』

『[[[:]]』』

白鳥のような大型の怪物——

ハクチョウ “閃光の翼^{せんこう}ブランウイング” は甲高い鳴き声を上げて

から大きく羽ばたき、3体のモンスターを纏めて吹き飛ばす。モンスター達が吹き飛ばされていくその先で待ち構えていたファムは、再度装備されたウイングスラッシャーを

振り上げ……

「はあっ!!」

飛んで来るモンスター達を、ファムの必殺技——“ミステイースラッシュ”で片っ端から一閃していった。斬り裂かれたモンスター達は胴体が真っ二つになり、ファムの後方で大きな爆発を起こしていく。

『シヤアッ!!』

「!? うわ、くっ……!!」

しかしその直後、今度は青いカミキリムシのような怪物——“ゼノバイター”と、セミのような怪物——“ソノラブーマ”の2体がファムに襲い掛かって来た。ファムが2体の猛攻に押され、ブレードがプロバジエルと相対する中、アビスは更に現れた蜘蛛の怪物——“レスパイダー”と“ミスパイダー”を同時に斬り伏せる。

『ギシヤア!?!』

「ッ……次から次へと……!!」

「はあっ!! ……これ以上は分が悪いか……!!」

《ADVENT》

『シヤアアッ!!』

これ以上モンスター達を相手取ると不利になると踏んだのか、ブレードは召喚した赤

い鳳凰のような怪物——“ガルドサンダー”に掴まり、空高く飛び上がって行ってしまった。アビスもまた、ファムに襲い掛かっていたゼノバイターとソノラブーアの背中を斬りつけ、2体を強引に蹴り倒す。

「逃げるぞ、白鳥!!」

「わ、わかった!!」

《GUARD VENT》

『ギシャ……!?!』

『ジュルルルル……!!』

ファムはブランウイングの両翼を模した盾——“ウイングシールド”を召喚し、ファムとアビスの周囲に無数の白い羽根を展開。それに構わず2人に襲い掛かろうとするモンスター達だったが、瞬時に2人の姿が消えた事で、それらの攻撃は空振りに終わる。

思わぬモンスター達の襲撃もあってか、結果として3人のライダーは全員死ぬ事なく、この場から離脱する事に成功したのだった。

「あくもく、ほんつと嫌になる」

数時間後、どこかの公園にまで逃げ切った夏希と二宮。2人は適当なベンチに座り込んでから、回収した食糧の内、フルーツの缶詰を開け終えたばかりの夏希は、かなり疲れ果てた様子でベンチにもたれかかっており、その横では二宮が缶切りを使って、肉の缶詰を開けようとしている真つ最中だった。

「ライダーどころか、モンスターにまで襲われるなんてさあ。ゆつくりご飯を食べる暇もないじゃん」

「無事に逃げ切れただけマシだろ。お前もさっさと飯食って、今の内に腹を満たしとけ」
缶詰の蓋を開け、コンビニからくすねて来たプラスチックのスプーンで缶詰の中の肉を食べ始める二宮。その横で夏希はベンチにもたれかかったまま、空を見上げながら呟いた。

「あのおじさん、ちゃんと逃げれたのかな」

「……敵の心配なんかしてどうする。俺達を倒そうとしてきた奴だぞ」

「だからって、死んでくれたらラッキー……なんて、簡単に割り切れるかよ。できる事なら、誰も殺したくなんかないっていうか……」

「お前はそうだとしても、他の奴等までそうだとは言えんだろう。下手な情けは命取りになる。死にたくないのなら、嫌でも割り切るしかない」

「そりゃ、そうだろうけどさ……」

「……この世界に閉じ込められたライダーは13人」

肉の食べ終えた缶を近くのゴミ箱に放り捨て、ペットボトルのお茶を口にする二宮。そんな彼の視線は、その先にある文字の反転した看板を正確に捉えていた。

「その中で、生きてここから抜け出せるのはたった1人。生き残るには、1週間以内にそのたった1人の勝者を決めなければならない……俺達がやっているのはそういうゲームだ」

「…………うん」

「少しでも生き残れる確率を上げる為に、俺達はどうして手を組んだんだ。そして最後には、残った俺達2人で殺し合う…………他のライダー達の事まで気にしてる余裕なんざ、俺達にはないだろう」

「…………だから嫌になるって言ったんだよ」

夏希は不服そうな様子でプラスチックのフォークを手に取り、缶詰のフルーツを口に
する。

「なんで1人だけなんだ？　そもそもあの女、アタシ達にこんな殺し合いをさせて、一体
何考えてるんだよ」

「そんな事まで俺が知るか…………まあ、疑問がないと言えば嘘にはなるが」

夏希は口に含んだフルーツを噛み締めながら、二宮はペットボトルのお茶で喉を潤し
ながら、数日前に起きた出来事を思い起こす。

『目覚めなさい、かつての戦士達』

突如聞こえてきた謎の女の声。

る。
それを聞き取り、目を開いたその瞬間から……物語の歯車は、再び回り始めたのである。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Advent Again 2

キイイイイイン……キイイイイイン……

『目覚めなさい、かつての戦士達』

響き渡るのは謎の女性の声と、甲高い耳鳴り。

それらを聞いて、眠りについていた者達は、次々と目覚め始めた。彼等は今、周囲にいくつかの鏡が置かれた謎の部屋の中に集められていた。

「ツ…………ツ」は……」

『ここは人間が存在してはならない、非現実の世界』

「何だ、ツ…………」

彼等は皆、何故自分達がこんな所にいるのかわからなかった。同時に、謎の女性の言葉聞いて、意味がわからず首を傾げる者が大半だった。更に……

「……俺は、誰だ？」

1人の男がそう呟く。彼には過去の記憶がなかった。他の者達も皆、同じような反応を示していた。そんな一同に対し、謎の女性は言い放った。

『戦いなさい。再び』

『そうすれば記憶は戻ります』

『そして、約束します』

『生き残った最後の1人は、本当の人生を取り戻せると』

「本当の、人生……どういう意味だ……？」

また別の男が、謎の女性に問いかける。その疑問に答えるように、女性の言葉が続いた。

『ミラーワールドから抜け出し、現実世界に戻る事ができる』

『戦いに勝ち残った、1人だけが』

一同は困惑した。どこかもわからないような場所に連れて来られたかと思えば、全員記憶をなくしており、更にはここにいる面子で殺し合いをするよう告げられたのだ。そうならば当然、それに反感を抱く者だって出て来る。

「ツ……誰なんだよアンタ、そんなの信じられつかよ!!」

『他に道はありません』

『あなた達にできるのは、私を信じる事』

『信じて戦う事』

反感を抱いた男の言葉も、謎の女性の前にバツサリ斬り捨てられる。男がもはや文句すらも言えず黙り込んでしまった後、女性は改めて一同に言い放つ。

『さあ、戦いなさい。ライダー』となつて』

「「「「……！」「」」」」

ライダー。謎の女性が告げたその名前に、その場にいた全員が反応した。何故ならその名前は、記憶がないはずの彼等に残っていた、数少ない記憶の1つだったのだから。

『期限は7日』

『7日の内に、勝者を決めなさい』

「……ッ!!」

次の瞬間、まるでガラスのように空間が砕け散り、気付けば一同は全く違う場所にいた。彼等が見た物、それは周囲に広がる街の景色……だけではなかった。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!』

『キキキキキキキ!!』

『シャアアアアアアッ!!』

『グルルルルル……!!』

『ピイイイイイイイイイイ……!!』

「ツ……これは……!!」

ドラゴンが。

蝙蝠が。

コブラが。

虎が。

白鳥が。
ハクチョウ

動物の姿をした様々な怪物達が、この場に集結していた。

この光景に、一同は言葉を失った。

それは目の前に広がる光景が、あまりにも非現実的過ぎる光景だったからではない。

「モンスター……!!」

今この場に存在している怪物達が、自分達にとって馴染み深い存在だったからだ。自

身の頭上を飛行した白鳥ハクチョウの怪物——ブランウイングの姿を捉えながら、夏希がその名

を小さく呟いた。

誰もが、この光景に圧倒されている中……1人だけ、他とは全く違う反応を示す者が

いた。

「——嬉しいぜ」

それは先程から黙って話を聞いていた、黒いインナーに蛇柄のジャケットを着た金髪の男。ガゼルのような怪物があちこちを跳躍し、エイのような怪物が頭上を通り去る中、無精ひげを蓄えたその金髪の男——あさくらたけし「浅倉威」はニヤリと笑い、その場からすくつと立ち上がった。

「また……「祭り」が始まるってか」

「何……？」

その言葉に茶髪の男——二宮が反応する中、浅倉はコブラの紋章が刻まれた紫色のカードデッキを突き出した。銀色のベルトが装着される中、彼は一定のポーズを取ってから、カードデッキをベルトに装填する。

「変身……！」

いくつかの鏡像が重なり、浅倉は紫色のボディを持つコブラのような戦士——おうじや「仮面ライダー王蛇」へと姿を変える。首を回して大きく息を吐く王蛇の前に、ある男は驚き、ある男は強く睨みつけ、そして夏希は頭に頭痛が走り、痛む頭を手で押さえた。

(ツ……あの男……どつかで見たような……)

しかし記憶がない今の彼女では、浅倉の正体を思い出す事はできない。その一方、先程謎の女性に反感を抱いていた黒髪の男——キトシんじ「城戸真司」もまた、着ているパーカー

のポケットからドラゴンの紋章が刻まれているカードデッキを取り出した。

「体が覚えてる……」

「え？」

「俺は……前にも、変身した事がある」

夏希が振り返る中、真司はそう呟きながら、王蛇に続くようにカードデッキを正面に突き出す。ベルトが召喚されたのを確認した彼は右手を斜め上にまっすぐ伸ばし、王蛇と同じ言葉を叫んだ。

「変身!!」

デッキをベルトに装填し、真司は赤いボディに銀色の鉄仮面が特徴の戦士——仮面ライダー龍騎^{りゆうき}への変身を完了する。シャツと拳を握り締めながら気合いを入れる龍騎だったが、その後すぐに自分が何故こんな事をしているのか、そもそも何故この姿の事を知っているのかという疑問で頭がいつぱいになった。

「ッ……また……!」

龍騎の姿を見た途端、夏希は再び頭痛で頭を押さえる。見覚えはあるはずなのに、何故か思い出せない。頭痛だけが頭に残り、夏希の気分は最悪だった。

「クハハハハ……ハア」

そんな中、王蛇は低い声で笑いながら、正面にいる龍騎を仮面越しに見据える。その

際、王蛇に比較的近い場所に立っていた二宮は嫌な予感がした。

(ツ………まずい!!)

「ハアツ!!」

「え………ぐはあ!？」

「ぐうつ!？」

二宮が素早く後ろに下がったその直後、王蛇は自分のすぐ近くに立っていた坊主頭の男、ページュのコートを着た男の2人を邪魔だと言わんばかりに蹴り倒し、殴りつけた。それに周囲の面々が驚いているのも無視し、王蛇は正面にいる龍騎に向かって襲い掛かった。

「ハアアアアアアツ!!」

「どわつと………!？」

龍騎は王蛇の拳を受け止め、彼が繰り出して来る攻撃を必死に捌いていく。いきなり始まったライダー同士の戦いに、変身していない者達の表情には困惑と焦りが浮かび上がる。

「へえ、面白そうじゃん」

すると今度は、迷彩柄のダウンコートを着た男が楽しそうな表情で笑い、サイの紋章が刻まれたカードデッキを取り出した。

「せっかく用意して貰ったこのゲーム、楽しまなきや損だよね」

ダウンコートの男——“芝浦淳”は“しほらじゆん”はデツキを正面に突き出し、ベルトが装着される。その後は右腕を正面に振り下ろしながら、彼も王蛇や龍騎に続いて変身を遂げる。

「変身！」

いくつもの鏡像が重なり、芝浦は頭部と右肩の角が特徴的な銀色の戦士——“仮面ライダーガイ”の姿になる。ガイは拳を強く握り締めてから、今も頭を押さえている夏希に狙いを定めた。

「おい、危ないぞ!!」

「え……きやつ!!」

「く……!!」

ガイの裏拳で殴られた夏希を、たまたま近くに移動していた二宮が咄嗟に受け止める。それを合図に、周囲の者達も一斉にそれぞれの行動を取り始めた。

「そうだ……これが、ライダーの戦い……」

「くそ、こうなりや俺も戦るしかねえよな……!!」

「い、嫌だ……戦うなんて御免だあ!!」

冷静に戦況を見極めようとする者。

自らも変身して戦おうとする者。

戦わず逃げ去ろうとする者。

皆がバラバラに動き、周囲に散り散りになっていく。それは殴られて倒れかけた夏希と、そんな彼女を抱き留めた二宮も例外ではなかった。

「おい、お前は どうする……!?!」

「ア、アタシは……ッ!!」

頬を殴られた痛みからか、夏希の表情には恐怖心が芽生えかけており、二宮に抱き留められた状態からとても動けそうになかった。そんな彼女を見かねた二宮は小さく舌打ちし、彼女を強引に立ち上がらせる。

「ッ……来い、こっつちだ!!」

二宮は夏希の手を掴み、引っ張るように彼女を連れながらその場から離脱。王蛇と龍騎、ガイやそれ以外のライダー達が争い始めたその光景は……現実世界にて、建物のガラスに映り込んでいた。

「ねえママ! 次あそこ行こー!」

「あそこね、わかったわ」

「課長、例の資料について話が……」

しかしその光景が、現実世界で生きている人達の目に映る事はない。鏡の世界で熾烈な戦いが始まるうとしている事など、人々は知る由もなかったのである……

「——で、今に至るって訳なんだが」

「ほんつと最悪。あの一本角、次会ったら1発殴り返してやる」

それから数日が経過し、現在はライダーバトルが始まってから3日目。あのまま成り行きで一緒に行動するようになっていた夏希と二宮は、この日もブレードやモンスターとの戦いを無事に切り抜け、こうして公園まで逃げ切るに至っていた。

「今にして思えば、俺も不思議でならんよ。何であの時、俺はわざわざお前を助けようとしたんだか」

「でもあの時、アタシを助けてくれたのは正直助かったよ。ありがとな」

「たまたま俺が近くにいて、倒れ込んできたお前を受け止めただけだ。助けた内に入るかよ」

「相変わらず素直じゃないねえ、アタシの素敵な騎士様♪」

「誰がお前の騎士だ」

二宮の腕に抱き着いてからかうように笑う夏希と、彼女に抱き着かれ鬱陶しそうに引き離そうとする二宮。しかし二宮がどれだけ引き離そうとしても、腕に抱き着いてきた夏希は離れようとしなかった。

「……………これでもさ。アンタには感謝してるんだよ、ほんとに」

「……………いきなりどうした」

先程までと打って変わり、夏希の表情から笑顔が消え、代わりに不安そうな表情が浮かび上がる。

「正直、凄く怖かった。急にあんな戦いが始まってさ。あの時、二宮に助けて貰ってなかったらって思うと……………」

「その時は、他の奴等の戦いに巻き込まれてご臨終だったろうな」

「……………なあ二宮」

夏希は二宮の腕を抱き締めていた力を強め、細い指先が二宮の服の袖をギュツと掴む。二宮はそんな彼女に一瞬表情をしかめたが、彼女を横目で見た際にある事に気が付き、敢えて彼女を引き離さずそのままにした。

「アタシ達、本当にここから出られるのかな……………」

「……………俺達が生き残ったとしても、ここから出られるのはどちらか1人だけだろうな」
「嫌だよ、そんなの……………死にたくなんかないし……………1人にだつてなりたくない……………」

震えた声を発しながら、袖をギュウツと掴んで離さない夏希。その様子に二宮は呆れた様子を見せながら、彼女の額にデコピンを繰り返した。

「痛っ!？」

「いい加減離れろ、腕が締め付けられて痛いんだよ」

「ツ……………アンタさあ、こんな時までほんと空気を讀ま——」

喋っている途中だった夏希が突然黙らされる。驚く夏希の唇に、二宮の人差し指が押し付けられていた。

「勝手に俺を殺すな。俺とて、こんな所で死んでやるつもりはない。だが、そんな威勢だけで生き延びられるほどの戦いは甘くない……………だから」

人差し指を離し、今度は夏希の頬に優しく触れかける。その動作に驚く夏希だった

が、自身の頬に触れている彼の温かな手を、彼女の心が拒もうとしなかった。彼の腕に抱き着いていた彼女の両手も、いつの間にか離れていた。

「お前の協力が必要だ。お前も死ぬのが嫌なら、命懸けで俺にその手を貸し続けろ。それが俺にとっても、お前にとっても最善の道だ」

「二宮……」

「余計な事は考えるな。必要のない不安は、俺が全て取り除いてやる……わかったな」

「……うん」

頬に触れられる事で、二宮の温もりを感じたからか。夏希は二宮の言葉に頷きながら、自身の頬に触れている彼の手を両手で掴み取った。そんな彼女のしおらしい姿に、二宮はどこか既視感のような物を感じていた。

(この感じ……どこかで体験している)

そのような体験は、彼の記憶にはない。しかしこの感覚を、彼の体は覚えていような気がした。それもあつてか、二宮自身もまた、自分の手を掴んでいる夏希を振り払おうという気にはなれずにいた。

この関係が、たとえ一時的な物だったとしても。

今はただ、この状況に縋りついていた。

夏希も、二宮も、その思いで頭がいっぱいになってしまっていた。

一方、とあるカフエテラス……

「ま、そういう訳だからさあ」

テーブルを挟むように椅子に座りながら、仮面ライダーガイの変身者——芝浦は正面の椅子に座っている1人の男と対話していた。

「ちよつとばかり、引き受けてくれると助かるんだけど」

「……ああ、俺に任せてくれ」

芝浦からの頼み事を、その男は引き受けた。その返事に芝浦は小さく笑みを浮かべてみせた。

さらにとある廃墟では……

「遅いな……何事もなければ良いんだけど」

「心配すんなくて。アイツはそう簡単にやられやしない」

「……ま、そうだと良いけどな」

そして……

「先生……」

「どこにいる……俺と遊んでくれる奴はいないのかあ……!!」

「……行くか」

ライダー達の思惑は、
彼等の気付かないところで交差していく……

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Advent Again 3

「じゃあ、今日はここで休む？」

「ああ」

その日の夜。夏希と二宮は公園を離れ、自分達が休む為の新たな拠点を見つけ出してた。これまで2人が拠点として使っていたマンションは、ブレードに発見されたコンビニのすぐ近くに建っている。その為、このまま戻っても再び彼に見つかる危険性があり、もう拠点としては使う事ができない状況だった。

「ああくやつと休めるう〜」

「ここがミラーワールドだから良いとはいえ、お前も遠慮のない奴だな」

そこで2人が新たに拠点として使う事に決めたのが、特に何の変哲もない普通の一家。家その物はそれほど目立つような外見ではない為、少人数が身を潜めるには打つつけの場所だ。今回はここで夜を過ごすと決めてから、2人は順番に風呂場でシャワーを浴びた後、寝室のベッドで休みを取ろうとしていた。

「だって、ここに来るまでの間も何度かモンスターに襲われたんだからさあ。そりゃ寝床見つけたら飛び込みたくもなるじゃん」

「まあ、それは俺も否定はしない。何にせよ、いつまたモンスターや他のライダーに出くわすかわからん。万が一の事態に備えて、お前も早く休ん……」

「あ、ねえねえ二宮。なんかエッチな本見つけた」

「聞いてたか人の話を」

ベッドの下に隠されていた、いかがわしい内容の薄い本を見つけた夏希。拠点を見つけてからというものの、やたらフリーダムな行動を取る彼女に対し、二宮は思わず頭を抱えたくなった。昼間のあんなにしおろしかった彼女は一体どこに行つたのかと。

「うわあ、滅茶苦茶ハレンチな内容じゃんこの本。こんなにエッチなのが好きなんで、この家主さんたぶん相当なスケベだね」

「まさかこんな形で他人に見られる羽目になろうとは、この家主には同情するよ」

「今頃、元の世界で奥さんか恋人にバレてお仕置きされてるかもねえ。あ、二宮も読む？」

「いらん」

「即答?! ……まいつか、アタシも別にこんな必要ないし」

夏希はその薄い本をベッドの下に戻してから、氷入りのお茶を飲んで二宮の隣まで移動し、彼に寄り添うように座り込む。普段は気さくで明るい雰囲気な彼女だが、二宮の隣にいる今この瞬間だけ、「女」としての雰囲気強く醸し出していた。

「一度あんな夜を過ごしちゃったらさ……もう、こんな本じや物足りないもん」

「……その様子じゃ、早く休めと言ったのは聞こえてなかったようだな」

「アタシ思うんだ。もうちよつとだけ運動してからのの方がよく眠れるかもって」

今現在、2人は互いにバスロープ姿だ。おまけにこの場には自分達2人しかいない。そんな状況だからこそ、胸の内側から湧き上がって来る強い欲望を抑えようという気持ちには、この時の夏希にはなかつた。

「ね、良いでしょ?」

「……全く」

二宮はまだお茶の残っているコップを近くの棚に置き、改めて夏希の隣に座り込む。それから数秒ほど互いに顔をジツと見つめ合った後、2人は何も語らぬままゆっくり顔を近付けていき……唇が重なり合った。

ちゆ、ぴちや、と互いの舌が交わり、次第に夏希はとろんとした目を浮かべ始める。逆に二宮はいつも通りの鋭い目付きをしたまま、まるで獲物を喰らう肉食動物のように、目の前の獲物おんなをまつすぐ見据えていた。

やがて2人は熱い接吻を続けながら、二宮が夏希を抱きかかえる形でベッドへと倒れ込んでいく。2人が深い眠りにつく頃には既に、コップのお茶は氷が溶け切り、温くなってしまうていた。

ライダーの戦いが始まってから、4日目の昼。

(……面倒だな)

この戦いを生き延びるべく、ライダーは皆それぞれ異なる行動を取る。そのパターンは大きく分けて2つ。

夏希や二宮のように、ライダー同士で一時的に手を組んでいる者。

それとは逆に、誰とも組まずに単独で動いている者。

たまたま見つけたバイクに乗って街中を移動していた黒コートの男——

秋山蓮^{あきやまれん}

“は、後者のパターンだった。彼は他の誰とも手を組む事なく、向かって来るライダー

やモンスターを迎え撃つスタイルで行動していた。

そんな彼は今……厄介な相手に目を付けられてしまっていた。

「遊んでくれよ。秋山」

バイクを急停止させた蓮の前に現れたのは、蛇柄ジャケットを着た金髪の男。最初の1日目から積極的に戦いを求めていたその男の名前を、蓮は何故かハッキリ覚えていた。

「……浅倉威か」

ヘルメットを外した蓮はバイクから降り、レザーグローブを外しながら浅倉と対峙する。

「俺もお前の名前を覚えている……て事は、過去に関わりがあったらしいな」

「ああ。他の奴等と違って俺は覚えてるぜ、全てな」

（何……?）

全てを覚えている?

他のライダー達は記憶を失っているというのに、何故この男だけは記憶がハッキリ残っているのか。疑問が尽きない蓮だったが、彼の考えている事を知ってしらすか、浅倉は楽しそうな様子で互いを指差した。

「仲良かったぜ、俺達は……殺し合うほどになあつ!!」

「……ッ!!」

そう言いながら駆け出した浅倉は、蓮の顔面目掛けて右腕を振るい、蓮も右腕を振り上げて攻撃を受け止める。互いの右腕が交差したまま、2人は同時に自分達のカードデッキを取り出し、ベルトを装着する。

「変身!!」

両者は同時にデッキを装填。浅倉は仮面ライダー王蛇に、蓮は西洋の騎士を模した紺色の戦士——「仮面ライダーナイト」に姿を変えた。

「クハハハハ……!!」

王蛇は楽しそうに笑い声を上げた後、拳を振るうもナイトはそれを回避。距離を取った2人は同時に召喚機を取り出し、王蛇はコブラを模した杖状の召喚機——「がしやうじやう牙召杖ベノバイザー」に、ナイトは長剣型の召喚機——「よくしやうけん翼召剣ダークバイザー」にカードを装填する。

《《SWORD VENT》》

王蛇はドリルのような形状をした金色の剣——「ベノサーベル」を、ナイトは大型の槍——「ウイングランサー」を装備し、ジリジリと距離を詰め始める。その後、すぐに動き出した王蛇がベノサーベルを振り下ろし、ナイトはウイングランサーでそれを防御し、激しい攻防を繰り広げ始める。

「オラアツ!!」

「ツ……はあつ!!」

とあるトンネルまで移動しながら、王蛇は何度もベノサーベルを振り回し、ナイトはそれをウイングランサーで的確に受け止める。しかし、戦いの流れは王蛇が掴みつつあった。

「ハアツ!!」

「うおあつ!?!」

剣術なんてあつたものでない、ただ乱暴に振り回すだけの王蛇。しかし浅倉自身の好戦的な性格が、王蛇の繰り出す攻撃をより凶悪かつ強力な物としており、その荒々しい攻撃を前にナイトは徐々に押され出していく。ウイングランサー自体が大型なものあつて、ナイトは上手く反撃ができずにいた。

「く……ぐあ!?!」

「フン、ハアツ!!」

ナイトが繰り出したウイングランサーの一突きを王蛇は難なくキャッチし、逆にナイトの顔をベノサーベルの柄部分で殴りつけ、彼の腹部を力強く蹴りつける。そのままベノサーベルを再度振り下ろし、ウイングランサーで攻撃を受け止めたナイトは壁まで追い込まれる。

「クハハハハ……!!」

「ッ……!!」

王蛇は楽しそうに笑い、ナイトは仮面越しに王蛇を強く睨みつける。このまま防戦一方な戦いが続くかと思われた……その時。

ズドオンッ!!

『フフウッ?!』

「!?!」

王蛇の後方から謎の銃声と、モンスターの悲鳴が聞こえて来た。それに気付いた王蛇とナイトが見た先には、地面に倒れている猿のような怪物——『デッドリマー』の姿。そして2人が右方向に視線を向けると、そこには拳銃型の召喚機を構えている、緑色のボディと機械的な装甲が特徴的な戦士が立っていた。

「フッ……!!」

『フフアアッ?!』

その緑色の戦士——『仮面ライダーゾルダ』はその手に構えた拳銃型の召喚機——

『機召銃マグナバイザー』から弾丸を放ち、『デッドリマー』を退ける。どうやら彼

の銃撃を受けた事で、王蛇に背後から襲い掛かろうとしていた『デッドリマー』を怯ませた

ようだ。

「……貴様、俺を庇ったな」

しかし、王蛇はそれが気に入らなかった。敵同士であるはずのライダーが自分を庇うなど。ましてや、自分がかつて付け狙っていたライダーがそれを行ったのが、王蛇の怒りに触れてしまっていた。

「どういふつもりだ……馬鹿にしてるのかあっ!!」

王蛇は標的をナイトからゾルダに切り替え、ゾルダに向かって駆け出していく。残ったナイトがそのままデッドリマーに攻撃を仕掛けに行く中、王蛇はゾルダ目掛けてベノサーベルを振り下ろそうとしたが……その直前で、突然ゾルダが変身を解除した。

「……!?!」

その不可解な行動に、王蛇も思わず動きを止める。ゾルダの変身を解除したその男の素顔は、王蛇が思っていた人物の物とは違っていた。

「先生!」

「……先生?」

自分を「先生」と呼んだその男に、流石の王蛇も僅かにだが困惑の反応を示す。しかしよくよく見てみると、その男は自分の知っている人物である事に王蛇は気付いた。

「貴様、確か北岡の……吾郎とか言ったな」

「先生……よく(ぐ)無事で」

その男——ゆらじろう「由良五郎」は安堵した様子で、王蛇に対して頭を下げた。その行動は王蛇にとつて理解不可能な物だった。何故なら目の前にいる男は、かつて自分が付け狙っていた男の秘書であり、彼自身も自分を強く敵視していたはずだからだ。

「またお傍に置いて下さい。俺、先生に尽くしたいんす」

「……フン」

拳句の果てに、自分に尽くしたいとまで言い出してきた。訳がわからないと言った様子で、王蛇は変身を解除して浅倉の姿に戻り、吾郎に背を向けその場を立ち去ろうとした。吾郎は慌てて彼を引き止めようとするが、浅倉はそんな彼を乱暴に突き放す。

「先生、待って下さい……!!」

「誰が先生だ。貴様、ミラーワールドに来ておかしくなったのか？ 話にならん」

興醒めたのか、浅倉はそれ以上戦おうという気になれず、吾郎を放置して去つて行くこうとする。それでも吾郎は諦めず、必死に浅倉を呼び止めようとする。

「お願い先生!! 俺、先生がいないと……!!」

「離せ、気色悪い」

「ツ……嫌つす!!」

しつこく付いて来ようとする吾郎に苛立った浅倉は彼の胸倉を掴み、その顔を強く殴りつける。それでも吾郎は浅倉の足にしがみついて離れようとしなかった為、浅倉は

指を組んだ両手を吾郎の背中目掛けて何度も力強く振り下ろした。

「ラアッ!!」

「痛いっ……!! 嫌っす……嫌っすう……ッ!!」

決して離れようとしないうるのしつこさに、流石の浅倉も薄気味悪さのような何かを感じ取ったのか。彼は何度も暴力を振るつたが、それでも吾郎は折れる事なく、必死に食らいつこうとしていた。

「はあっ!!」

『フフアアアアアアッ!?!』

一方、王蛇の追撃から逃れたナイトはと言うと、デッドリマーを撃破しているところだった。ウイングランサーで胴体を貫かれたデッドリマーが爆散し、跡形もなく消滅し

たのを確認したナイトはウイングランサーを下ろす……しかしその直後。

「!! うおっ!？」

突如、ナイトの背中を強烈な痛みが襲った。何事かとナイトが振り向いたその先から、ガルドウィップを装備したブレードが襲い掛かって来た。

「モンスターを倒して油断したか、甘いな!!」

「ぐっ……!!」

ブレードはガルドウィップを何度も振るい、離れた場所から執拗にナイトを攻撃し続ける。ナイトはウイングランサーで何とか攻撃を防ぐが、ガルドウィップがウイングランサーに巻きついた事で、ナイトは動きを制限されてしまう。

(ツ……ならば……!!)

「!? 何……ツ!!」

そこでナイトは、戦法を切り替える事にした。ガルドウィップが巻きついたウイングランサーを敢えて手離し、それに驚くブレードを他所に、ナイトはダークバイザーに1枚のカードを装填する。

《《NASTY VENT》》

『キキキキキキキ!!』

「なっ……ぐ、うあああああ……ツ!？」

どこからか飛来した蝙蝠のような怪物——「闇の翼やみ つばさ」が超音波を発し、その音に怯んだブレードがガルドウィップを手離す。その隙を見逃さなかったナイトは跳躍して一気に距離を詰め、ブレード目掛けてダークバイザーを振り下ろす。

「はあ!!」

「ぐああつ!!」

強烈な斬撃を受けたブレードが、溜まらず地面を転がる。その間にナイトは素早く次のカードを引き抜き、ダークバイザーに装填する。

《FINAL VENT》

『キキイーツ!!』

「はああああああ……!!」

再度召喚されたウイングランサーを構えたナイトが走り、その後方から飛来したダークウイングがナイトの背中に合体し、ダークウイングの翼がマントのように変化。そのままナイトはその場から飛び立ち、ウイングランサーを軸にマントをドリル状にしながら、ブレード目掛けて高速で突っ込んだ。

「はああああああつ!!」

「なつ……ぐあああああああああああつ!!」

その強烈な一撃——「飛翔斬ひしょうざん」がブレードに命中し、地面に着地したナイトの後方

で大きな爆発が起こる。爆風が晴れると共に、ブレードの変身が解けた中年の男は血反吐を吐いて倒れ伏し、ナイトの変身を解除した蓮も倒れた中年の男に視線を向ける。

「ば、馬鹿な……私は……まだ……ッ!!」

「……!?!」

倒れている中年の男は、その体が粒子のようになって少しずつ消え始めていた。それを見た蓮が驚く中、中年の男は生きる事を諦めまいと、辛うじて動く右手を必死に伸ばそうとする。

「私は、まだ……生、き……て……ッ……」

言葉はそこで途切れた。中年の男は粒子となつて跡形もなく消え去り、そこにはほんの僅かに赤い血が残っているだけだった。その一部始終を目撃した蓮は、動揺を隠せなかった。

死んだ?

いや、殺した?

俺が、この手で……?

自分はただ、襲つて来る敵を撃退しようとしただけ。殺すつもりなど微塵もなかった。そのはずだったのに、自分は今、この手でライダーを殺してしまった。

「はあ、はあ、はあ……」

手の震えが止まらない。呼吸もどんどん荒くなっていく。目の前で見てしまったライダーの死は、蓮の心に深く刻み込まれていた。

「ツ……うあああああああああああつ!!!」

蓮の絶叫が響き渡る。

そしてその様子を、近くのカーブミラーに映り込んでいた謎の女性が、ただ静かに眺めていたのだった。

——仮面ライダーブレード、死亡。

残るライダーは、あと12人。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Advent Again 4

ナイトがブレードを撃破する数時間前……

《STRIKE VENT》

「はあ!!」

「どわっ!」

ある森の中の廃墟。その付近では今、複数のライダー達による乱戦が繰り広げられていた。その場にいるライダーは合計7人。

城戸真司が変身した赤い戦士——仮面ライダー龍騎。

エイのような特徴を持った赤紫色の戦士——“仮面ライダーライア”。

カメレオンのような特徴を持った黄緑色の戦士——“仮面ライダーベルデ”。

ガゼルのような特徴を持った茶色の戦士——“仮面ライダーインペラー”。

龍騎、ライア、ベルデ、インペラーの4人は「他のライダー達を倒すまで」の間、一

時的にチームを組む事で休戦状態となり、他のチームと対立していた。

芝浦淳が変身した銀色の戦士——仮面ライダーガイ。

蟹のような特徴を持ったメタリックなオレンジ色の戦士——仮面ライダーシザース”。

白虎のような特徴を持った青と銀色の戦士——仮面ライダータイガ”。

ガイ、シザース、タイガもまた、他のライダー達を潰す為に3人で一時的に手を組み、手始めに龍騎達のチームを潰そうと戦闘を仕掛けたのである。

「はあ!!」

「どわあっ!!」

サイの頭部を模した手甲型の武器——“メタルホーン”を振るい、龍騎を高所から突き落とすガイ。落下した龍騎は地面に叩きつけられるも、すぐに立ち上がってガイを睨みつける。

「大人しく死ねよ。生き残るのは俺だ」

「ふざけるな、誰が!!」

《SWORD VENT》

高慢な口調で挑発してくるガイに対し、カツとなったのか龍騎は柳葉刀のような形状をした長剣——“ドラグセイバー”を召喚し、それを構えてガイに斬りかかる。その

すぐ近くではシザースが背中から地面に叩きつけられ、そこにインペラーが跳躍しながら殴りかかる。

「ぐお……!!？」

「でやあああああつ!!」

インペラーの攻撃を転がって回避したシザースは、続けて繰り出されてきたインペラーの回し蹴りを両腕でしっかりガードする。そのまた近くではライアとベルデの2人をタイガが相手取っており、ライアの蹴りを受けたタイガが後退し、ガイと背中合わせになる。

「くっ……!!」

「ふうん、やるじゃん」

タイガと背中合わせになったガイが余裕そうな態度を見せる中、龍騎は左腕に装備したドラゴンの頭を模したガントレット型の召喚機——りゆうしゅうきこう 龍召機 甲ドラグバイザー——にカードを装填し、それを見たライアも左腕に装備したエイのような盾型の召喚機——ひしょうだて 飛召盾エビルバイザー——にカードを装填する。

《《 STRIKE VENT 》》

《《 COPY VENT 》》

「はあああああ……!!」

赤いドラゴンの頭部を模した手甲型の武器——“ドラグクロー”が龍騎の右手に装備され、それをコピーしたライアの右手にもドラグクローが装備される。2人がドラグクローの口元から火炎放射を放とうとする一方、タイガは虎の顔が付いた斧型の召喚機——“白召斧びやくしやうふデストバイザー”に、ガイは赤い角が生えた左肩の鎧よろいに付いている召喚機——“突召機鎧とつしやうきがメタルバイザー”にカードを装填する。

《FREEZE VENT》

《CONFINE VENT》

「はあっ!! ……あ、あれ?」

「何……!?!」

「へへへ……!」

龍騎とライアが繰り出したドラグクローによる火炎放射は、それぞれガイが発動したコンファインメント、タイガが発動したフリーズメントの冷気によって無効化される。驚く龍騎とライアに対し、ガイとタイガは戦う相手を入れ替える形で2人に襲い掛かる。

《HOLD VENT》

「はっ!!」

《SPIN VENT》

く。一方でベルデもまた、この場から逃げ出す為に左足に装備した召喚機——
舌召糸ぜっしやういとバイオバイザー」に1枚のカードを装填した。

《CLEAR VENT》

「ひとまず引き上げるぞ!!」

「はい……!!」

『『『ヴヴヴ……!!?』』』

クリアーベントの効果を発動したベルデがインペラーの肩に触れ、2人は一瞬にして透明化。2人を見失った数体のシアゴーストが驚いた様子で周囲を見渡す。

「手塚、大丈夫か!」

「城戸、お前は先に行け!! 必ず追いつく!!」

「ツ……わ、わかった!! 死ぬなよ!」

ライアから先に逃げるよう言われ、龍騎は襲い来るゲルニユート達を薙ぎ倒しながら戦場を脱出。結果としてこの戦いでも、脱落するライダーが現れる事はなかったのだ。た。

「乾杯！」

その後、街のとある噴水広場まで逃走した龍騎こと城戸真司。彼は合流した2人の仲間、ベルデの変身者であるベージュのコートを着た男——「きむらだいち」木村大地、インペラーの変身者である眼鏡をかけた男——「いしたりよう」石田諒と共に缶ビールで乾杯しようとしていた……が、明るいノリの真司に対し、木村と石田は無言のまま暗い表情で乾杯し返した。

「……おい、何だよノリ悪いなあ。せつかくさあ生き残ったんだからさあ、パーツと楽しくやろうぜ！」

ビールを一口飲み、ご機嫌になった真司は食糧である缶詰に手を付け始める。

「お摘まみもさ、ほらこんなにいっぱいあるんだから——」
「今そんな気分じゃねえつつうの」

「え？」

明るく振る舞おうとする真司だったが、木村はそんな彼の台詞を遮り、どこか疲れたような表情で溜め息をつく。石田もまた、あまり真司のノリに付いて行こうという意志はないようだった。

「城戸、お前は良いよな。いつも能天気で」

「ッ……何だよ」

「僕達は相変わらずミラーワールドに…… “地獄” から出られずにいるんですから」

ライダー同士の戦いが始まってからもう4日目。現時点で戦いはどこまで進行しているのか。現時点でライダーは何人死んでいるのか。他の生き残っているライダー達は今どこで何をしているのか。それらの状況が一切わからないのもあって、彼等はかなり疲弊してしまっていた。

「……俺だつて不安だよ。俺達には記憶がないしき。覚えてるのは名前くらいで、何故ミラーワールドにいるのかもわからない……でも、だからこそ楽しくやろうとしてんじゃないか。いけないのかよ？」

もちろん、内心不安を抱いているのは真司も同じだった。むしろそうまでして明るく振る舞っていないければ、その不安に心を押し潰されてしまいかねない。それは木村と石田も薄々わかっているのか、真司の明るい態度に対しそれ以上何か言う事はなかつ

た。

「……遅いな、手塚さん」

そんな時、石田は現時点でこの場にいないもう一人の仲間の名前を呟いた。ライアの変身者である男——“手塚海之”はまだ、この3人と合流できていない。何かあったのではないかと石田は最悪の可能性を考え込んでしまう。

「まさか、逃げ遅れてモンスターに……!」

「大丈夫だよ。アイツはそう簡単にやられるような奴じゃない」

芝浦達との戦いでも、自ら殿を務める事で自分達仲間を逃がしてくれた男だ。きつと今頃、何とかしてモンスターの群れからも逃げ切れている事だろう。他者に関する記憶もないはずの真司だったが、手塚に関しては何故か、そんな安心感があった。

「……でもさ、お前いつも手塚、手塚だな?」

「だって……手塚さん、僕達のリーダーな訳だしさ」

「リーダー? おいちよつと待てよ、そんなん誰が決めたんだよ」

石田の告げた“リーダー”発言に、真司が思わず待ったをかける。どうやら手塚をリーダーだと認識しているのは石田くらいで、真司と木村は誰がこのチームのリーダーなのか特に決めてはいなかったらしい。その為、いつの間にか手塚がリーダーになっている事など、真司にとっては初耳だった。

「だって……手塚さんが、纏めてくれたおかげで僕達4人、手を組めた訳だし……」
「まあ、それも一時しのぎだな」

2人の会話を黙って聞いていた木村が口を開いた。

「俺達も最後には殺し合わなきゃならない。このバトルの勝者はたった1人、最後に生き残った奴だけ……そういうルールだからな」

「そりゃあ、そうだけどさ……なあ、お前達は本当にあの女の言葉、信じてるのか？ 俺にはどうもわかんないんだ。何故あの女は、こんなゲームを仕組んだのか……」

「でも俺達は信じるしかない。あの女を……それがここから抜け出せる、たった1つの希望なんだ」

それは最初の1日目で、謎の女性から告げられた戦いのルール。ライダー同士の殺し合いで生き残った最後の1人だけが、勝者の証として過去の記憶を取り戻し、このミラーワールドという「地獄」から脱出する事ができる。他に方法がない以上、自分達には彼女の言葉を信じて戦う以外の道はない。木村の発言に、真司と石田は何も言えず言葉に詰まってしまふ。

「……大体何者なんだ？ あの女」

「きつと神様か何かさ。信じる者は救われるってな」

人間同士で殺し合いをさせるような神様なんて、とても信用できないだろうがな。木

村がそんな皮肉を言いながら缶ビールを口にしている中、唯一まだビールを口にしていない石田は、どこか焦りが募った表情で再度口を開いた。

「それにしても、あれから4日……一体何人のライダーが死んだか……」

「何にも教えてくれないんだもんなあ、あの女……なあ、他のライダー達は今どうしてると思う？ 芝浦達以外にもさ、ほら、一番最初に変身してた紫の奴とか。あと、女のライダーも1人いたよな」

「さあな。女のライダーなら、他のライダーと一緒に逃げてるどこまでは見たが、それつきりだ。そもそも、組んですらいらない奴の心配なんかしたって仕方ないだろう？」

「いや、そりやそうだけどさあ……やつぱり心配なんだよなあ。ほとんどが男の中、女は1人だけだったし……」

その唯一の女ライダーである夏希はと言うと……

「ああ〜最高〜……♪」

早朝、先に目覚めた二宮が朝食を作っている間に、夏希は風呂場でシャワーを浴びているところだった。シャワーヘッドから放たれる熱いお湯が、夏希の体の上を流れ落ちていく。

(またいっぱい、気持ち良くして貰っちゃった)

シャワーの蛇口を捻ってお湯を止め、目の前の鏡に映る自分の裸体を凝視する夏希。二宮と共に過ごした昨夜の熱い時間を思い浮かべた夏希は、無意識の内に右手が動き、自身の腹部を優しく撫でるように触れていた。

(いつそ、このまま2人でずっと……流石に駄目かな)

わざわざ現実世界に戻ろうとせずとも、このまま2人でずっと、このミラーワールドで生きていくのもそんなに悪い事ではないんじゃないか。そんな夏希の考えは、きつと

二宮には却下される事だろう。それは流石に考えが甘過ぎるかなと、夏希はどこか寂しげな表情を浮かべながらも自身の体を洗い続ける。

(それでも、二宮となら私は——)

『もお、また靴紐解けてるじゃない。たく、しょうがないな』

「——ッ!?!」

突如、夏希の脳内に頭痛が走り、それと共に浮かび上がった謎の光景。夏希は思わず自身の頭を押さえた。

「……何だ、今の……?」

自分が、誰かの靴紐を結んであげている姿。

しかし、その相手の素顔まではわからなかった。

きつと相手は二宮だろうと結論付けようとする夏希だったが、それでも僅かに違和感のような何かがあった。

「……いや、これ以上考えても無駄か」

どれだけ考えてもわからないのではどうしようもない。この事は時期を見て二宮に

話そうと、そう考えた夏希は再び蛇口を捻り、全身の泡を綺麗に洗い流していく。

この時、彼女は気付かなかった。

風呂場の入り口のすぐ近くで……

「——フツ」

二宮とはまた違う別の男が、怪しげな笑みを浮かべてどこかに消え去っていった事に。

場所は変わり、現実世界。

ピッ……ピッ……ピッ……

医療法人、聖中央病院。そのとある集中治療室にて、昏睡状態となった1人の女性が寝かされていた。

（——やめて）

眠りについていないはずの女性は、その閉じている目から一筋の涙が零れ落ちる。

（お願いだから）

女性の脳裏に蘇る過去の記憶。

土砂降りの中、道路に停まっている1台の車。

道路に放られている、壊れてしまっている1本の傘。

そしてそこに倒れている、意識のない女性。

（もうやめて、達也）

意識のない女性は、必死に呼びかけ続けていた。

届くはずのない言葉を、ある1人の男に。

「はあ、はあ……ッ」

同時刻。街中ではある事件が発生していた。その事件を起こしているのが、現在警官隊に包囲されているある1人の男。その男は目の前に立ち塞がっている警官隊を睨みつけながら、左手に持っていた時計のような小道具のスイッチを起動する。

【RYUKI】

息を飲む警官隊の前で、男の姿が変異する。

龍の鱗のような赤いボディに、赤い複眼が剥き出しになった銀色の鉄仮面。

右手に装備した柳葉刀のような禍々しい長剣と、赤い龍の頭部を禍々しく象った手甲。

そして胸部装甲に書かれている、「RYUKI」と「2002」の文字。

その姿は、仮面ライダー龍騎を彷彿とさせていた――

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

A d v e n t A g a i n 5

「グルアアアアアアアッ!!」

「!!!うわああああああつ?!」!!!」

謎の男が変身した、龍騎のような姿をした禍々しい怪物。彼は警官隊の銃撃を物ともせず、むしろ銃弾をその身に受けながら警官隊に真正面から突撃していく。ドラゴンの頭部を模した手甲で警官達が薙ぎ払われ、倒れた1人の警官に向かって長剣が振り下ろされようとしたその時……

《ジカンギレード!》

《ジカンザックス!》

「はあつ!!」

左右から割って入って来た長剣と斧が、怪物の長剣を受け止めてみせた。怪物が視線を上へ上げたその正面には、それぞれカタカナで「ライダー」、平仮名で「らいだー」と描かれた複眼を持つ2人の戦士が立ちはだかつていた。

《ジユウ!》

「グッ……!?!」

「ライダー」と描かれた複眼の戦士——「仮面ライダージオウ」が長剣型の武器——
 「ジカンギレード」を長剣から銃形態に変形させ、至近距離で怪物の胸部に銃撃を命中させる。攻撃を受けた怪物が後退し、ジオウは再度ジカンギレードを長剣形態に切り替え、その隣に並び立った「らいだー」と描かれた複眼の戦士——「仮面ライダーゲイツ」は斧型の武器——「ジカンザックス」を構え直しながら、厄介げな表情で怪物の名前を口にする。

「またコイツか……!」

「アナザー龍騎……!」

「又ウウウウウ……ッ!!」

「アナザー龍騎」と呼ばれた怪物が2人の戦士を睨みながら武器を構え直し、ジオウとゲイツが武器を構え直してから再び突撃。2人が振るう武器を、アナザー龍騎は自身の長剣で的確に防御し、逆に2人の胸部装甲を斬りつけ纏めて薙ぎ払ってみせた。

「グルア!!」

「ぐあ?」

「うわっ!! く、だったら……!!」

《オーズ!》

ジオウは取り出した時計型のアイテム——「ライドウォッチ」を取り出し、スイツ

チを起動して腰に装着しているベルト——ジクウドライバー”の左側のスロットに装填。ジクウドライバーの上部のスイッチを押し、ベルト本体を半時計回転させる事で、ライドウォッチに秘められた力を発動する。

《アーマータイム!》

「!? グガツ……!?」

すると、どこからか3体の動物を模したアーマーが現れ、それぞれ鷹、虎、飛蝗を模した3体のアーマーがアナザー龍騎に体当たりを繰り返して、アナザー龍騎が怯んでいる間にジオウの周囲に集まる。そして3体はそれぞれ頭部、胸部、脚部のアーマーに変形し、ジオウの体に装備。そしてジオウの複眼には「ライダー」の文字に代わり、「オーズ」とカタカナで描かれた文字の複眼がセットされる。

《タカ! トラ! バッタ!》

《オーズ!》

「はあっ!!」

3種類の動物の力を駆使する、メダルの戦士の力を宿した形態——“オーズアーマー”となったジオウは姿勢を低くして構えた後、飛蝗の脚力を活かした跳躍力で一気にアナザー龍騎に接近。虎の長い爪を模した武器——“トラクロウ”でアナザー龍騎を斬りつける。それに続くように、ゲイツもまた異なるライドウォッチを取り出し、

スイッチを起動した。

「ドラゴンにはドラゴンだ……!!」

《ウィザード!》

ライドウオッチをジクウドライバーの左側のスロットに挿し込んだ後、ゲイツはベルト本体を両手で反時計回りに回転させ、ライドウオッチの力を発動する。するとゲイツの頭上に赤色の大きな魔法陣が出現し、それがゲイツの肩付近まで降下した後、魔法陣その物がアーマー状に変化し装備されていく。

《アーマータイム!》

《プリーズ!》

《ウィザード!》

「フツ!!」

「ヌツ……グアア!?!」

最後の希望であり続けた、魔法使いの力を宿した形態——「ウィザードアーマー」となったゲイツは自身の前に魔法陣を出現させ、ゲイツが手をかざすと共に魔法陣から火炎放射が放たれる。ジオウに気を取られていたアナザー龍騎はその炎を直に浴びてしまい、その場に膝を突く。

「行くよゲイツ!!」

「ああ……!!」

《《フィニッシュタイム!》》

《《オーズ!》》

《《ウイザード!》》

ジオウとゲイツはドライバーに挿し込んでいる2つのライドウオッチのスイッチを押して、ドライバーのスイッチを押してからベルト本体を反時計回りに回転。ジオウがその場から高く跳躍する中、ゲイツは再度自身の前に魔法陣を出現させて右足を通し、巨大化した右足を長く伸ばしていく。

《《ストライクタイムバースト!》》

「グウツ!」

ゲイツの巨大な右足によるキックが、長剣と手甲を交差して防御しようとしたアナザー龍騎を後退させる。その衝撃で怯んだアナザー龍騎が防御態勢を崩されたその直後、高く跳躍していたジオウが「タカ」「トラ」「バッタ」と描かれた3つの円状のエネルギーを猛スピードで通過していき、その勢いのままアナザー龍騎目掛けて強力な飛び蹴りを炸裂させた。

《《スキヤニングタイムブ레이크!》》

「セイヤアアアアアアアアアアッ!!!」

「グアアアアアアッ?!」

ジオウが繰り出したキックをその身に受け、吹き飛ばされたアナザー龍騎が地面を転がっていく。ジオウが地面に着地し、ゲイツが魔法陣に通していた右足を縮小化させて元に戻す中、地面に倒れ込んだアナザー龍騎はボディ各部から火花が散りながらも、長剣を杖代わりにしてその場から立ち上がった。

「そんな、効いてない!?!」

「変身を解かせる事すらできないか……!!」

「ハア……ハア……俺の……俺の、邪魔をするなアッ!!」

「ぐああああああつ!?!」

アナザー龍騎は左腕の手甲を正面に突き出し、ドラゴンの口から大型の火炎弾を連射。それらがジオウとゲイツの周囲に着弾して大爆発が起きた後、爆風が晴れた先には既にアナザー龍騎の姿は消えてしまっていた。

「ツ……また逃げられた」

「逃げ足の速い……」

2人はアーマータムを解除し、ジオウは疲れた様子で地面に座り込む。ゲイツは悔しげな様子で建物の壁に拳を叩きつけながら、近くにあった建物の窓ガラスを睨みつけるのだった。

「ソウゴ、ゲイツ！」

その後、警官隊に犠牲者が出ていない事を確認したジオウとゲイツはすぐにその場を移動し、誰もいない公園に到着してから変身を解除。ジオウは茶髪の少年、ゲイツはハーネスを着用した黒髪の少年へと姿を変える中、そこにマントのような白いワンピースを羽織った、長い黒髪の少女が駆け寄って来た。

「アナザー龍騎は？」

「ごめんツクヨミ、また逃げられちゃった」

「そう……これでもう、被害が出たのは4件目ね」

茶髪の少年――

――常磐^{ときわ}ソウゴの返事を聞いて、白いワンピースを羽織った少女――

——「ツクヨミ」は手にしていたタブレットのようなデバイスの画面を操作し、画面にいくつかのニュース情報を写し出す。そこに載っているニュースのどれもが、突如現れた謎の怪物——アナザー龍騎による襲撃事件に関する物だった。

「今までのアナザーライダーは、特定の条件を満たした人物を狙って襲う奴ばかりだった。でも今回は、そういった条件もなしに無差別に人を襲ってる」

「襲う相手を選ばない分、どのアナザーライダーよりもタチが悪いな……」

アナザーライダー。

それは仮面ライダーの力を宿した怪人の総称。

別の時間軸からやって来た謎の集団——「タイムジャッカー」によって生み出される。

本来、その資格を持たない人間が仮面ライダーの力を手にした事で、アナザーライダーはどの個体も例外なく、本物の仮面ライダーとは似ても似つかない醜悪な姿をしている。

そしてアナザーライダーが誕生してしまうと、そのアナザーライダーと同じ力を持つ本来の仮面ライダーはその力と記憶を失い、そのライダーだった人物がこれまで辿ってきた歴史という名の「物語」を、アナザーライダーに丸々乗っ取られてしまうのだ。

今回のアナザー龍騎もまた、本来は仮面ライダー龍騎ではない人物がその力を宿した

事で、龍騎のような姿をしているだけの凶悪な怪物に成り果て、その力で多くの一般人を襲い続けている。

「おまけに、奴もミラーワールドを使って逃げてしまう。そんなところまでアナザーリュウガそっくりだ」

ハーネスを着た黒髪の少年——“みょうこういん 明光院ゲイツ”はかつて自分達が戦った、アナザー龍騎にそっくりな姿をした黒いアナザーライダーの存在を思い出す。その黒いアナザーライダーもまた、使用する武器やミラーワールドを行き来する能力まで同じだったが、あちらは受けた攻撃を跳ね返して来るという凶悪な能力まで使用していた。今回のアナザー龍騎はそういった能力まで行使して来る事はなかったが、そんな事は決して重要ではない。

「このままじゃ、アナザー龍騎によって被害が大きくなっていく一方だわ」

「だが、それを止める手段がないんじゃないでしょうか……」

アナザーライダーを完全に倒すには、そのアナザーライダーに対応した仮面ライダーの力を宿したライドウォッチが必要になる。

かつてライダーだった頃の力と記憶を失っている人物に接触し、その人物に何の力も宿っていないブランクウォッチを持たせる事で、アナザーライダーと同じ仮面ライダーの力を宿したライドウォッチが誕生するのだ。

しかし、今回は今までのアナザーライダーとは状況がまるで違っていた。

「ねえ、城戸さんが本物の仮面ライダー龍騎で間違いないのよね？」

「うん。あの後ももう一度会って、確かにブランクウオッチを持たせてみたんだけど……」

黒いアナザーライダーが起こした事件の中で、ソウゴ達は一度、城戸真司に出会った事があった。事件解決後、ソウゴは真司にブランクウオッチを持たせる事で、彼がかつて持っていた龍騎の力をウオッチに移し、龍騎ライドウオッチを手に入れようとしたのだが……

「何度やっても、龍騎ウオッチは手に入らなかった」

ゲイツの言う通り、真司にブランクウオッチを持たせ続けたにも関わらず、ブランクウオッチが龍騎ライドウオッチに変化する事はなかった。

彼が龍騎であった事は間違いないはずなのに、一体何故なのか？

龍騎ウオッチが手に入らない以上、次にソウゴとゲイツが考えた案が、2つのある特殊なライドウオッチを使ってでの変身だった。それらのウオッチを使用すれば、ジオウとゲイツはその能力が更にパワーアップし、わざわざ同じライダーの力を持つライドウオッチを使用せずとも、アナザーライダーを倒す事が可能になる……しかし。

「どうするの？ ジオウⅡウオッチも、ゲイツリバイウオッチも、あの男に奪われたままよ」

「そうなんだよなあ……ああもう、何でこうなっちゃうかなあ……！」

彼等は今、その2つのライドウオッチが手元に存在していなかった。ある者に奪われた事で、アナザー龍騎を倒す手段を失ってしまったのである。完全に手詰まりとなった今の状況に、ソウゴ達は頭を抱える事しかできなかったのだった。

「ハア……ハア……!!」

一方。ジオウとゲイツから逃れたアナザー龍騎は、ある路地裏に入り込んでから変身を解除し、男の姿に戻って階段に座り込んでいた。戦いによるダメージと疲労でその呼吸は荒くなっているが、彼の目は今もまだ気力、失ってはいなかった。

『順調のようだな』

「……!」

そんな彼の前に、一人の男が姿を現した。フードを被っていて素顔がよく見えず、怪しげな雰囲気醸し出しているこの男を前にしても、アナザー龍騎の変身者である男は薄気味悪く思うどころか、むしろ強気な口調でフードの男に語りかける。

「本当に、このやり方で良いんだろうな……!」

『ああ。命が集まり終わった時……お前の悲願は達成される』

フードの男はその手に持っていた水晶のような石を男に見せつける。その石が見せつける輝きに、男は自身が持っているアナザー龍騎ウオッチを見つめる。

「大丈夫だ、サラ……俺が必ず、君を救ってみせるから……!」

アナザー龍騎の変身者であるその男——

“かのうたつや加納達也”

は愛する者の名前を呟きな

がら、アナザー龍騎ウオツチを強く握り締める。

『達也、もうやめて。お願い——』

その愛する者が、自分の行いを止めようとしている事など、知る由もないまま……

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Adventure Again 6

「どうだ、白鳥」

「うくん……駄目、全然見当たんない」

ライダー同士の戦いが始まってから、5日目の朝。期限の7日目までタイムリミットがかなり近付いている為、夏希と二宮は一刻も早く他のライダー達を見つけるべく、街中を探索して回っていた。今現在、高層ビルの上から双眼鏡で街中を見渡している2人だったが、未だ他のライダーを見つけれずにいるようだ。

「くそつ奴等め、一体どこにいるんだ……?」

「いつその事さ。アタシ達がわざと派手に暴れて、他のライダー達を誘き寄せてみるってのはどう?」

「モンスターまで大量に呼び寄せるから却下」

「だよねえ」

夏希の考えはあっさり却下されたが、夏希自身も色々無茶過ぎるとは思っていたからか、却下されるのは想定内だったようだ。しかし二宮もまた、もしこのまま他のライダー達が見つからないようであればと、一か八かの可能性も頭の隅に置くようにはして

いた。それだけ、タイムリミットが迫っている今の状況に追い詰められつつあるという事なのだろう。

「二宮。もし期限までに決着がつかなかったらさ……アタシ達、一体どうなっちゃうんだろうな。ずっと、ここから出られないままなのかな」

「またその話か？ 余計な事は考えるなと言ったはずだ」

「だってさあ。期限までもうあと2日しかないんだよ？ 他のライダーがあと何人生き残ってるのかも全くわかってないんだし」

「だからこそ、今こうして生き残ってるライダーを探してるんだろ。お前はここから出たいと思わないのか？」

「そりゃね、出られるんならアタシだってここから出たいよ。ここはモンスターだらけだし、いつでもどこで襲われるかもわからない……でも」

双眼鏡を下ろし、階段に座り込む夏希。その表情は誰から見てもわかるくらい暗くなっており、それに雰囲気は何となく気付いたのか、二宮も双眼鏡を下ろして夏希の方に振り返る。

「アタシさ……アンタと一緒になら、ずっとここにいても良いかなって」

「何……？」

「アタシだって前にも言っただろ？ 死ぬのは怖いし、アンタと殺し合うのだって嫌だ

……ならいつその事、アタシ達2人でずつと一緒にいたいって。そう思ってる」

「……」

「……ごめん。アンタの都合も考えないで、急にこんな事言い出しちゃってさ。忘れて良いよ」

ここから出たいと思っっている二宮が、そんな提案を呑んでくれるとは思わない。故に、夏希は自分が胸に抱いていた願いを諦めるつもりでいた。それでも、残された時間くらいは一緒にいたいとも思っていた。

「……出られるのなら出たい。俺がそう思ってるのは事実だ。俺だってこんな所で死にたくはない」

夏希が黙り込んでから十数秒ほど経過した後、二宮は再び双眼鏡を覗き込みながら、静かに口を開いた。

「最後まで勝ち残った1人だけが、このミラーワールドを脱出する事ができる。それが、あの女が俺達ライダーに課したルールだ」

「……」

「……正直なところ、あの女の言葉を素直に信じて良いのかどうか、悩んでる自分がいる」

「……ええ？」

その言葉を聞いて、暗い表情だった夏希が思わず顔を上げて二宮の方を見た。

「期限がもう2日しかない以上、そういうネガティブな考えになつてしまうのも確かにわかる。だが、モンスターだらけなこの世界を1人で生き抜くのは正直無理がある……まあ、なんだ」

彼なりに気恥ずかしい物があつたのか、二宮は夏希の方を見てしまわないよう、敢えて双眼鏡を覗き込みながら言葉を続けた。

「もし期限までに決着がつかず、ずっとここに閉じ込められる事が確定してしまつた時は……その時は白鳥、お前の力を借りたい。俺がこの地獄を生き抜いていく為にも」

最後まで夏希の方に振り向かないまま、そう言い切つた二宮。そんな彼の言葉に、目を見開いた夏希は座つていた階段から立ち上がり、二宮の隣まで近付いてから……彼の頬を軽めに抓つた。

「ツ……おい、いきなり何だ」

「二宮アンタ……思つてた以上に不器用なんだな」

「喧しい。お前にだけは言われたくない」

「またそんな事言つてさあ。そんなにアタシの事が好きだつたんなら、最初からそう言えば良いのに。ほんと、アタシの騎士^{ナイト}様は素直じゃないねえ♪」

「だから騎士^{ナイト}って呼ぶのはやめ——」

それ以上、二宮の言葉は続かなかつた。変な呼び方を今すぐ訂正させようと、二宮が双眼鏡を下ろして夏希の方へと振り返つたその直後……二宮に抱き着いた夏希が顔を近付け、唇を合わせてきたからだ。数秒ほど経過してから唇を離れた夏希は、また「女の顔になり始めていた。」

「アタシの前でそう言つたんだ……その氣になつて、良いんだよな？」

「……好きなように解釈しろ」

2人は階段に座り込み、双眼鏡を置いてから改めて唇を合わせた。今度は唇が触れるだけでなく、互いの舌が触れ合い、絡み付くような熱い接吻を行い、蕩けた表情を浮かべ始めた夏希は二宮に抱き着き、彼を床に優しく押し倒してから一旦唇を離れた。

「ッ……随分積極的だな」

「今までやつた時はさ、アタシが下だったじゃない？ だから今度は……アタシが気持ち良くしてあげる」

仰向けになつた二宮の上に夏希が跨り、夏希が二宮を見下ろす体勢になりながら、彼女は二宮の唇を指先で触れる。そんな事をされても二宮は彼女を拒むような真似はせず、自分の感情を抑え込む事をすっかり忘れた夏希は上着を脱ぎ捨て、その下に着ていたシャツすらも捲り上げようとした……が。

「！ ちょっと待った」

「あいたつ!？」

何かに気付いた二宮が、夏希を強引に押し退けてから立ち上がり、双眼鏡で街中を見下ろし始めた。

(今の音……間違いない)

車のエンジン音。

二宮の耳は、その微かな音を聞き逃さなかった。二宮が双眼鏡で眺めた先にあつたのは、ビルからそう遠くない位置の駐車場に停まろうとしている一台の車。間違いない、他に生き残っているライダー達だ。

「やっと思つけた……行くぞ、白鳥」

「……はあい」

せっかくの良い雰囲気ை台無しにされてしまった。他のライダーを見つける事ができた二宮が僅かながら希望を見出し始める一方、この時だけは、二宮が見つけたというそのライダー達を恨みたくなつた夏希であつた。

「——おっかしいなあ」

二宮が双眼鏡で見つけたその一台の車。そこに乗っていたのは真司、木村、石田、そして彼等と合流した手塚の4人だった。彼等が今こうして、車に乗って移動していたのには理由がある。

『芝浦淳とちよつとな。俺達と手を組みたい、そう言ってる』

実は先日、真司達のチームと敵対していた芝浦のチームが、手塚を通じて真司達のチームと手を組みたいと提案して来たのだ。

何度も敵対してきた芝浦達が、一時的にとはいえ自分達の味方になってくれるというのだ。真司はその提案に大いに賛成し、木村も「あくまで一時しのぎ」だと念を入れつつこれに同意する事にした。

石田だけは芝浦達の事が信用できないと乗り気ではなかったが、彼が信頼を置いてい
る手塚から心配はいらないと告げられた事と、芝浦達と穩便に話し合う為に、彼等の
カードデッキも手塚が預かっているとわかり、それならばと最終的には石田も同意する
事となった。

そして手塚に自分達のカードデッキを預けた真司達はこの日、芝浦達が指定してきた
待ち合わせ場所で彼等と合流する為、芝浦達の到着を待ち続けていたのだが……

「おい、芝浦の奴等遅くないか？」

「ああ。アイツ等ほんとに俺等に付く気あんのか？」

待ち合わせの時間になっても、芝浦達が現れる様子はなかった。いくらなんでも遅過
ぎるんじゃないかと真司や木村が愚痴を述べる中、石田は不安そうな表情で手塚に呼び
かけた。

「手塚さん。なんか俺、嫌な予感が……」

「大丈夫だ。俺を信じろ」

手塚は占いを得意としている。記憶を失っているながらも癖として染みついていた彼
の占いは、恐ろしいくらいよく当たり、先日襲撃して来た芝浦達を迎え撃つ事ができた
のも彼の占いのおかげである。その占いにこれまで何度も助けられてきたのもあつて
か、石田もそれ以上は何も言わず、手塚を信じて待ち続ける事にした。

「ようー！」

そんな時、ようやく芝浦達が真司達の前に現れた。スカジャンを着た不良風の男——
 「石橋健太郎いしはしけんたろう」と、坊主頭の男——
 「戸塚健一とづかけんいち」の2人を引き連れてやって来た芝浦は、既に期限が2日しかない状況にも関わらず、余裕そうな笑みを浮かべていた。

「お待たせ〜」

「おう、芝浦！」

遅れて来た芝浦達に文句1つ言わず、友好的な態度で彼等に近付く真司。その様子を、後から尾行して追いついて来た夏希と二宮が建物の物陰から窺っていた。

（あ、アイツあの時アタシを殴った奴じゃん！ 今になって戦力を増やす気かよ……！）
 （いや待て、それにしても何か妙だ）

最初の1日目で自分を殴った芝浦に恨みがある夏希は、芝浦達が戦力を強化しようとしていると踏んで忌々しげに睨みつける。しかし、同じく隠れて様子を見ていた二宮は、目の前で繰り広げられている状況に違和感を感じていた。

（? どういう事だよ……?）

（今更手を組もうにも、ゲーム終了まであと2日しかない状況だぞ。それなのにあんなに多くのライダーを集めて、戦力を強化してる余裕はないはず。恐らくこれは……）

二宮が冷静に分析する中、2人が隠れて様子を見ている事を知らない真司は、缶ビー

ルが数本入ったビニール袋を持って芝浦達に近付いて行く。

「手塚から話は聞いた。じゃ一つよろしくな!」

「短い間だけだな」

「んじゃこれね、お近付きの印に、はい。ええつと芝浦の分は……」

たとえ短い間でも、今だけは心強い味方であつてくれる事に変わりはない。真司はお近付きの印として、ビニール袋から取り出した最初の缶ビールを戸塚を手渡し、続けて芝浦の分の缶ビールを取り出そうとしたその時……

プシューッ!

「つておいおいおいおい!」

突如、受け取った缶ビールをシャカシャカと上下に振った戸塚が、缶ビールを開けて真司の頭にビールをぶっかけて来たのだ。

「なんだよビールかけか、ええ!?! ああ目痛え……はは、まあそれも悪くないかもな!!」
いきなりのビールかけに真司は驚きつつも笑い、ビールをかけた戸塚に、それを見ていた石橋も楽しそうに笑い始める。なんだかんだで良い関係になれそうだと喜ぶ真司だった……その様子を見ていた芝浦が、突然こんな事を言い出した。

「めでてえ奴だなあ。これほど扱いやすいとはな」

「? 何だ、どういう意味だよ」

「言つたら、短い間だつて」

急に何を言ひ出したのか理解ができない真司に、石橋は見下したような目で笑いながらそう言い放ち、戸塚も真司から受け取つた缶ビールを興味なさげにその辺に放り捨てた。するとその直後……

パシッ！

「!?」

真司の頭上を何かが飛び、それを芝浦達がキャッチする。それはチーム同士で話し合ひをする為、芝浦達が手塚に預けていたはずの、芝浦達のカードデッキだった。

「て、手塚さん、これは一体!?」

何故彼等にカードデッキを返したのか、その真意を聞こうとした石田だったが、手塚は彼の言葉に対して無反応だった。それを見て、石田は察してしまった。

自分の悪い予感、的中してしまつたのだと。

「まさか……」

「——変身!」

カードデッキをベルトに装填し、芝浦はガイ、石橋はシザース、戸塚はタイガへと変身を遂げる。ガイ達が怪しげに笑う中、手塚もポーズを取つてから、カードデッキをベルトに装填しようとしていた。

「変身……!!」

カードデッキを装填し、手塚はライアの姿に変身。今この場で起こっている状況が理解できない真司や木村が戸惑いを示す中、ライアのすぐ近くに立っていた石田に、悲劇が襲い掛かった。

『キュルルルル……!!』

「え……うわあっ!?!」

エイのような赤紫色の怪物——“エビルダイバー”がライアの頭上を飛来し、石田に体当たりを仕掛けて来た。突然の攻撃に驚いた石田はその場でふらつき、そこにエビルダイバーが容赦なく襲い掛かった。

「あ、あああああああっ!?! て、手塚さん、手塚さああああああんっ!?!」

「なっ!?!」

「石田……!?!」

エビルダイバーにのしかかられた石田は、そのままエビルダイバーに捕食され跡形もなく消滅。彼を喰い殺したエビルダイバーがすぐに飛び去って行くのを見て、真司と木村はようやく状況を理解した。

自分達は、罠に嵌められたのだと。

「ツ……手塚お前、裏切りやがったのかよ!!」

「……別に、普通の事さ」

自分達を裏切った挙句、石田を殺害してしまったライアに怒りを抱いた真司。しかしライアが返してきた返事は、どこまでも冷淡なものだった。

「ふざけるな貴様!! 返せ、デツキを返せよ!!」

ライアに奪われたままのカードデツキを取り返すべく、ライアに掴みかかろうとする真司。しかし、生身の状態ではとても敵うはずもなかった。

「フンツ!!」

「どあ!?!」

「ツ……城戸!!」

案の定、ライアは鬱陶しげな様子で腕を振るい、真司を地面に薙ぎ倒してしまった。それを見てすかさず真司に駆け寄ろうとする木村だったが、そちらにはタイガとシザースが襲い掛かる。

「はっはあ!!」

「!?! くっ……がはあ!?!」

「へっへっへ……!!」

飛びかかって来たタイガのリアアットをかわすも、シザースに腹部を殴られてしまう木村。彼がその場に崩れ落ちる中、シザースは下卑た笑い声を上げながら、倒れた木村

を追いかけていく。

「嘘だろ……!!? アイツ等、あんな簡単に……!!」

「やっぱり罠だったか……そんな感じだろうとは思っていたが」

その一部始終はもちろん、物陰に隠れていた夏希と二宮もすっかり目撃していた。夏希はあっさり仲間を裏切り殺害したライアや、そのライアと共謀していたガイ達の卑劣さに怒りを覚え、それに対し二宮はこれが罠であった事を想定していたのか常に冷静さを保ち続けていた。

「……!!」

「待て、何をする気だ」

物陰から飛び出そうとした夏希を、二宮がすかさず引き止める。

「何って、このままだとアイツ等殺されるぞ!? 助けないと……!!」

「今の状況で飛び出したところで、俺達が不利になるだけだ。俺達が無かせずとも、勝手にライダーの数が減ってくれていると考えれば良い」

「でも……ツ!!」

このまま2人が助けに向かったところで、変身できない真司と木村を庇いながら、4対2という圧倒的に不利な戦いを強いられる事になる。そんな大き過ぎるリスクは避けなければならないという二宮の考えは、夏希とて全く理解できない訳ではない。しか

し理解はできても、彼女の心はそれに納得できそうになかった。

「くっ……!?」

「ククククク、ハハハハハハハ……!!」

ライアとタイガが真司を、ガイとシザースが木村を追い詰めていく。変身できない真司と木村は、ただ座り込んだまま後ずさる事しかできない。そんな2人を見下しているガイ達は楽しそうに笑いながら、どうやって殺してやろうかと頭の中で思考を張り巡らせていた……その時。

《FINAL EVENT》

“死神”は、突如としてやって来た。

「ハアッ!!」

『シャアアアアアアアアッ!!』

騒ぎを聞きつけてやって来たのか、突然現れた王蛇が空中に高く跳躍。その後方から現れた紫色のコブラのような怪物—— “ベノスネーカー” が毒液を放射し、毒の激流

に乗った王蛇が猛スピードで接近。その矛先は、王蛇の視界に映ったタイガへと向けられていた。

「ハアアアアアアアアアアッ!!」

「うわあああああああつ!!」

「「!?!」」

「なっ……!!?」

王蛇の毒液を纏った連続蹴り——“ベノクラッシュ”を背中に受けたタイガは大きく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられてから地面に倒れ込む。タイガの変身が解けた戸塚が苦しうに呻く中、彼の体は少しずつ粒子となり消滅し始める。

「!?! あ、ああ、ああああ……ツ……」

自分の体が消えていく状況に恐怖しながら、戸塚は碌に断末魔も上げられないまま跡形もなく消滅。想定外過ぎる乱入者の登場に、味方をやられたガイ達だけでなく、追い詰められていた真司と木村、その様子を見ていた夏希と二宮も驚く中、着地した王蛇はすぐに次の標的を捕捉する。

《SWORD VENT》

「楽しそうだなあ。俺も仲間に入れてくれよ……デヤアッ!!」

「!?! くっ……!!」

「うおっ!?!」

「どわつと!?!」

ベノサーベルを召喚した王蛇はすぐさまライアに攻撃を仕掛け、続けてガイとシザースにも襲い掛かる。ガイとシザースは慌てながらも必死に王蛇の攻撃を回避し、シザースが左腕に装備した鋏型の召喚機——こうしやうほふみ 甲召鋏シザースバイザー” でベノサーベルを受け止め、その隙にガイが王蛇を蹴りつけた。それから反撃に出ようとしたガイとシザースだったが……

ズドドオンツ!!

「ぐああっ!?!」

ガイとシザースの胸部装甲に数発の弾丸が命中し、火花が飛び散る。反撃の隙を潰された2人が振り向いた先には、マグナバイザーを構えているゾルダの姿があった。

「先生に、手出しはさせない……!!」

過去の記憶が混濁としたまま、浅倉を先生と呼び続けた吾郎。あれ以来、どれだけ暴力を振るっても離れようとしなかった吾郎に対し、流石の浅倉もとうとう折れたらしく、彼の忠義を試そうと思つた彼は吾郎に美味しい料理を作らせた。その命令に従つた吾郎は美味しい手料理を浅倉に振る舞い、その料理を気に入った浅倉はしばらくの間、吾郎を手下として付き従わせる事にしたのだ。

『お前、しばらく俺に尽くせ。お前を殺すのは……はは、一番最後だ』
『……ありがとうございませす』

こうして、吾郎を付き従わせた浅倉は街中を探索していたところ、ガイ達が真司と木村を追い詰めているところを目撃。祭りを楽しもうと浅倉が王蛇に変身して突撃し、そして現在に至ったのである。

「ハアアアア……ハッ!!」

「!? おわっ!?!」

ライアの振るうパンチをベノサーベルで弾いた王蛇は、そのまま真司にも狙いを定める。ライダーに変身できない奴がこの場にいたところで邪魔なだけ。生身の人間が相手だろうと、彼は一切容赦をしなかった。

「死ねエツ!!!」

「くっ——」

ガキイイイインツ!!!

王蛇が真司目掛けて振り下ろしたベノサーベル。それは横から伸びて来た黒い槍と、金色の薙刀の2本によって防がれていた。

「……………え？」

攻撃が来ない事に気付いた真司が顔を上げると、そこには2人の戦士が立っていた。

「はあ、はあ……………ツ!!」

「ツ……………間に合った……………!!」

仮面ライダーナイト。

仮面ライダーファム。

2人の戦士が今、真司の窮地を救い出した。

真司はただ、自分を救ってくれた2人の戦士の姿を、黙って見上げている事しかできなかつた。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Another Alternative 1

「ッ…………お前…………!？」

王蛇のベノサーベルを受け止め、真司の窮地を救ったナイトとファム。ナイトは自分と同じようにベノサーベルを防いでいるファムの存在に驚き、ファムはそんな彼に1つの問いを投げかけた。

「ねえ、アンタは味方だと思って良いの!？」

「…………好きにしろ!!」

「うおっ…………!？」

ナイトが王蛇の腹部を蹴りつけ、体勢が崩れた王蛇をファムがウイングスラッシュャーで押し返す。無理やり後退させられた王蛇だったが、彼は機嫌を損ねるところかむしろ楽しそうに笑いながら、自身に迫って来るガイやシザースを同時に相手取り始めた。

「ハハハ、ハアッ!!」

「はあ!!」

「うおらあっ!!」

「フン…………!!」

王蛇のベノサーベルとガイのメタルホーンがぶつかり合い、蟹の鋏を模した武器——
「シザースピンチ」を右腕に装備したシザースを軽くあしらう王蛇。そこに駆け付けたゾルダも参戦して混戦状態となる中、ナイトとファムは呆然として真司に呼びかける。

「逃げるぞ、こつちだ!!」

「ボサツとするな!!」

「へ? お……おう!!」

ナイトとファムに呼びかけられ、ハツとなった真司は彼等に続くように走り出そうとする。しかし逃走を図っていた3人の前に、エビルダイバーの尻尾を模した鞭型の武器——「エビルウィップ」を構えたライアが立ち塞がる。

「ふ、はあつ!!」

「!? チツ……!!」

「邪魔だ、どけよ!!」

襲い来るライアを退けようとする2人だったが、エビルウィップを自在に操るライアの攻撃を前に、思うように反撃ができない。そこに……

「はあ!!」

「ツ……ぐああつ!!」

フアムに攻撃を仕掛けようとしたライアの背中を、アビスが背後から蹴りつけた。そのまま振り向こうとしたライアの胸部にアビスバイザーを突きつけ、水のエネルギー弾を至近距離で連射して圧倒する。

「二宮！」

「ほんとに世話が焼けるな、お前という女は」

当初は助太刀に入るつもりなど毛頭なかった二宮。しかし真司が王蛇に襲われかけている姿を目撃した夏希がフアムに変身して飛び出して行ってしまった為、止むを得ず二宮もアビスに変身して参戦したのである。

「おい、立てるか？」

「ツ……あ、ああ」

アビスは近くで座り込んでいる木村に呼びかけ、木村も少し遅れて返事を返す。木村がその場から立ち上がるうとしたその時、シザースを蹴りつけて押し退けたゾルダが、アビスに向かってマグナバイザーで銃撃を仕掛けた。

「フツ!!」

「!? ぐっ……!!」

「二宮!!」

銃撃を受けたアビスの動きが止まり、その隙にゾルダがマグナバイザーの装填口を開

き、ファイナルベントのカードを装填。ガイと戦っていた王蛇がゾルダの横に並ぶ中、ゾルダが装填口を閉じた。

《FINAL VENT》

『ブモオオオオオオ……!!』

音声と共に、ゾルダの正面にバツファローとロボットを合わせたような怪物——
はがね きょしん
 鋼の巨人マグナギガ^{はがね きょしん}が出現。マグナギガの背部にゾルダがマグナバイザーの銃口を接続すると、マグナギガは両腕の大砲を上げた後、頭部の砲口、両足の光線砲、胸部装甲のミサイル砲を一斉に展開し、それぞれの砲口にエネルギーを収束させ始めた。

「!? マズい……走れえ!!」

「ツ……白鳥、そいつを連れて行け!!」

「ちよ、二宮!!」

嫌な予感があったナイトが大声で叫ぶ中、アビスはファムに真司を連れて行くよう言い放つてから、自身は木村を連れて離脱しようとする。アビス達と対峙していたライア、ガイとシザースも慌てた様子でその場から逃げ出そうとする一方で、マグナギガはエネルギーのチャージを完了させ……

「ハアツ!!!」

ドガガガガガガガガガガガガガガガ!!

バキyunバキyunバキyunツ!!
ドウンツドウンツドウンツドウンツ!!

マグナバイザーの引き鉄が引かれると共に、マグナギガが一斉掃射を開始。弾丸やレーザー、ミサイルなどによる無数の砲撃——“エンドオブワールド”は前方の通路を次々と破壊していき、その範囲の大き過ぎる爆撃から逃げ切れなかったライダー達は次々と爆風の中に巻き込まれていく。

「ぐあああああああつ!」

「うわあああああああつ!」

「きゃあああああああつ!」

ズドドドドオオオオオオオオオオオツ!!!

ライダー達の悲鳴も、連鎖する爆発音の中に掻き消されていく。目の前で爆炎が燃え盛るその光景を、ゾルダの横に避難していた王蛇は楽しそうに笑いながら眺めていたのだった。

「クハハハハハ……!! そうだあ、祭りはこうでなくちやなあ……!!」

その様子を、近くのカーブミラーから謎の女性は見届けていた。

『残された時間は、あと2日』

『どうか急いで下さい、ライダー達』

『そうでなければ、私は』

『私は……』

悲しげな表情を浮かべながら、ライダー達に呼びかけ続ける謎の女性。
彼女の言葉が、ライダー達の耳に届く事はなかった。

「——ん」

エンドオブワールドの爆発に巻き込まれ、意識を失ってしまった真司。

「……あれ？」

次に真司が目覚めた時、そこは謎の空間が広がっていた。真つ暗闇の中、周囲には宙に浮いた鏡の破片が無数に存在し、あちこちで光が反射して輝きを放っている。その不思議な空間の中に、真司は1人立っていた。

「(ト)は……」

「ここは一体何なのか。困惑した様子で真司が周囲を見渡していた時……彼の前に、あ

る人物が姿を現す。その人物の姿を見た真司は、表情が固まった。

「ッ……お前は……!!」

「——俺と1つになれ」

それは、真司だった。否、真司であり真司ではなかった。

何故ならその真司は、パーカーの文字が反転していたのだから。

本来の真司からは考えられないほど、邪悪な顔をしていたのだから。

「——そうすればお前はもつと強くなり」

「——このライダーバトルに勝利できる」

邪悪な笑みを浮かべた真司は、動揺している真司に右手を差し伸べる。

「——さあ、俺を受け入れろ」

1歩、また1歩と、邪悪な笑みを浮かべた真司が近付いて来る。

「ッ……来るな」

それに恐怖を感じた真司は、自分に近付いて来るそれを必死に拒み続けた。

目の前にいるそれを、受け入れてはならない。

受け入れてしまえば、取り返しのない事になってしまうと。

「来るな……!!」

真司はそれを、本能で察知していた。

「……来るなあっ!!!」

「——ッ!?!」

そこで、真司は目覚めた。場所は地下通路。大きな石柱に背を付けて眠っていた彼は、目が覚めると同時に周囲をキョロキョロと見渡し、近くに立っていた蓮と夏希が自分の方に視線を向けている事に気付いた。

「目が覚めた?」

「え? あ……」

夏希から呼びかけられて、真司は先程までの出来事を思い出した。エンドオブワールドの爆撃に巻き込まれた後、ライダーに変身していた2人が身を挺して守ってくれたお

かげで、何とか生還する事ができた真司。彼は自分を助けてくれた2人の名前を必死に思い出そうとする中、蓮の方から真司に問いかけて来た。

「確か、城戸真司とか言ったな？」

「お前は……秋山……」

そう、何となくだが名前は浮かび上がって来た。真司は蓮の方を見ながら、その名前を言い当ててみた。

「……ロンか？」

「ぶふっ……！」

「……蓮だ」

残念ながら、1文字だけ間違っていたようだ。名前の呼び間違いに夏希が口元を押さえて噴き出す中、蓮はそれに少しだけ眉をピクリと反応させつつも、静かに名前を訂正した。

「あ、ああそうだ、蓮だ、うん……で、そっちの君は……誰？」

夏希の名前を思い出そうとする真司だったが、こっちはまず名前すら思い出す事もできなかつた。夏希が思わずその場でズッコケたその横で、今度は蓮が小さく鼻で笑っていた。

「ツ……わかんないのかよ。アタシだけ酷くない？」

「あ、ああごめん、本当にわからなくて……えっと、名前教えてくれないか？」

「はあ……白鳥夏希。これで思い出した？」

「白鳥、夏希……うん、うん……」

「……思い出せてないでしょそれ」

「あ、バレた？」

「アンタねえ……ッ」

「落ち着け。まずは話をするのが先だ」

ワナワナと拳を震わせる夏希を蓮が諫め、彼が話を進める事にした。

「皆それぞれ、名前を覚えてる相手も違うらしいな。俺もこの女の名前を知らないが、この女は俺達の名前を覚えてるらしい」

「城戸真司に、秋山蓮でしょ？ アタシがこうして名前を覚えてやってるのに、アンタ達は名前まで忘れてるなんて酷いじゃない。男として最低だと思わない訳？」

「あ、それは……ほんとにごめん」

「はあ……もう良いよ、何度も謝られても仕方ないし。で、こうして相手の名前を覚えてるって事は、自分達は過去に何か関わりがあつたんじゃないかって、こいつと話をしてたって訳」

「まあ、ただのご近所さんって可能性もあるがな」

「はあ、なるほど……」

真司と蓮は互いに名前を覚え合っていて、2人は夏希の名前を覚えていないが、夏希は2人の名前を覚えている。思い出せる記憶に違いがあるのかどうかは不明だが、相手の名前を覚えているという事は、その覚えている相手とは過去に何か関わりがあったのではないかと、蓮と夏希はそう推測していたのである。

「……まあとにかくさ！ 2人共、助けてくれてありがとな！ これからも1つよろしく、な！」

「よせ」

真司が差し伸べた手を払いのけ、蓮は石柱に背を付けて腕を組む。

「俺は別にお前だから助けた訳じゃない。俺は……この馬鹿げたバトルを止めたいだけだ」

「アタシはただ、人が死にかけてるのを見殺しにしたら寝覚めが悪くなると思っただけ。正直、相手はアンタじゃなくても別に良かったよ」

「……お……おおっ！」

蓮と夏希はツンとした態度でそう言っただけのけるが、真司はショックを受けるどころか、人助け自体は相手が誰でも行うという2人の考えに、むしろ感動していた。

「あ……いや、なんていうかさ……立派、じゃないか？ うん」

「……そんなんじゃない。声に従ってるだけだ」

「声？」

蓮の言葉に、真司と夏希が首を傾げる。

「俺の中で声がするんだ。この戦いを止めろってな。誰の声かはわからないが……」

蓮の中で聞こえてくるという、何者かの声。それが夢の中で、ずっと蓮にそう呼びかけているらしい。それが誰の声なのかはわからないが、その声に従うべきなのではないかと。何となくだが、蓮はそう感じていたようだ。

「そうか……俺にも、会いたい奴がいる」

真司は蓮と夏希に語る。自分も同じように、夢の中でいつも謎の男が、こちらに呼びかけてくるのだという。しかし逆光のせいで、その素顔はいつもよく見えない為、それが誰なのかはわからないようだ。

「ふうん。アンタも同じような夢見てたんだ」

「アンタもって事は……君も？」

「うん。アタシもね、いつも夢の中に出て来るんだ。顔のわからない誰かが。それから……」

たまに頭の中に、自分が誰かの靴紐を結んであげている光景が思い浮かぶ事。それも真司と蓮に語り明かし、夏希は2人に何か心当たりはないかと問いかけてみた。しかし

何も思い出せないようで、真司も蓮も首を横に振るしかなかった。

「なあ、他に何か覚えてる事ってないか？ 過去について」

「いや……」

「アタシも。後はもう何も思い出せない」

「……だよなあ」

3人共、これ以上思い出せそうな記憶は何もないようだ。完全に手詰まりになった為、真司はひとまず話題を変える事にした。

「あ、でも俺、戦いを止めるってのには賛成だ！ それに俺……あの、デツキ奪われちゃってさ」

真司は元々、ライダー同士の戦いに内心乗り気ではなかった為、蓮の目的には大いに賛成の様子だった。しかし自分のカードデツキは手塚に奪われてしまっており、現在は龍騎に変身できないが。それに対して蓮は疑うような目で問いかける。

「負けが見えてるから戦いを止めたい、という訳か？」

「いやいや、違うよ！ なんていうかさあ、そのお……平和が好きなんだよ俺は」

「平和が好き？ アンタが？」

「そう、平和……って何だよその目は」

蓮も夏希も、真司の発言に対してジーっと冷めた目を向けている。どうやら2人共、

真司の言葉をあまり深く信用している訳ではないようだ。失礼な奴等だなあと思いつつ、真司はある事を思いついたのか、手に持っていたビニール袋からある物を取り出す。「あ、そうだそうだ。ほれ、それつと」

「！」

真司が取り出したのは、2本の缶ビール。彼はその2本をそれぞれ蓮と夏希に1本ずつ投げ渡し、真司も自分用の缶ビールを取り出した。

「俺達が出会ったのも何かの縁だ。意見が合ったところで、乾杯しようぜ〜」

ウキウキな気分で缶ビールを開けようとする真司。それに対し、互いに視線を合わせた蓮と夏希は、自分が持っている缶ビールをシャカシャカと振り、それを真司に向けてから……

プシャアアーツ!!

「つておいおいオオイ!?!」

2人同時に、真司の顔目掛けてビールをぶっつけた。何事かと驚く真司に、蓮と夏希は溜め息をつきながらビールの噴き出た缶を眺める。

「こんな物を後生大事に持ってたのか?」

「アンタ、筋金入りの馬鹿ね」

「……アンタ等やな奴だな! ええ?」

殺されかけていたというのに、わざわざ缶ビールなんて物をずっと携帯していたというのか。呆れて物も言えない2人に対し、真司は物凄く嫌そうな表情を浮かべた。

「あ、もしかして、俺達過去でも仲悪かったんじゃないか!？」

「それだけは間違いなさそうだな」

「ほんとにね。あゝあ、何でアタシこんな馬鹿助けちゃったんだろうなあゝ」

「君ねえ、馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿言い過ぎだつての!」

「だつて馬鹿じゃん。今だつて、靴紐が片方ほどけてるのに全く気付いてないっぽいし」

「え? どれどれ……あついつの間に!？」

いつの間にか靴紐がほどけていた事に今まで気付かなかったのか、慌てて靴紐を結び始める真司。その様子を見ていた夏希は、自身の脳裏に浮かんだ例の光景の事を考える。自分が靴紐を結んであげた相手、それはまさか……

(……いや、ないな。流石にこんな馬鹿ではないでしょ)

その可能性は絶対あり得ないと、夏希は頭の中でピシヤリと断言してみた。彼女がそんな事を考えていたとは、何とか靴紐を結び終えた真司は知る由もない。

「……過去と言えば」

「……ここで蓮が、別の人物について話題を切り出した。

「浅倉威だったか。奴は全て覚えてるらしいが……」

「……浅倉、威」

真司と夏希が、口を揃えてその名を呟く。確かに最初の一日目でも、浅倉は戦いが始まる事を喜んでいる様子で、我先にと王蛇に変身していた。彼なら、自分達の過去について何か知っているのではないか。

(ツ……………また……………)

浅倉の名前を聞くだけで、夏希の頭に僅かにだが頭痛が襲い掛かった。何となくだが、思い出さなくてはならないような事の気がする。それなのに結局、その場で夏希が記憶を呼び起こす事はなかった。

「……直に日が暮れる。モンスターもいるのに、夜中歩き回るのは危険だな」

「じゃあ、今日はもうどっかに隠れてやり過ごさしかないか……なあ、どうする?」

「アタシは一旦帰るよ。二宮もたぶん、アタシの帰りを待つてるだろうしね」

「二宮……あの鮫みたいなライダーの事か?」

「そう、二宮。アンタ達と違って、アタシの名前もちやんと覚えてくれてる、とびつきりに良い男♪」

「一言多いんだよ……………ツ!!」

「……………二宮、か」

真司と夏希が子供のような口喧嘩をしている傍らで、蓮は二宮の名前から彼の素顔が

脳裏に思い浮かぶ。彼について覚えているのは名前だけ。素性についてはわかりようなどないはずなのだが……

(……何だ、この妙な胸騒ぎは……?)

何か、嫌な予感がしてならない。

この時、蓮はそんな感じがしたのだった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:

Another Alternative 2

真司、蓮、夏希の3人が話をしていてその一方、とある豪邸では……

「惜しかったなあ〜」

鉄板の上でジュージューと、肉がこんがり焼けていく音が鳴り響く。中庭で食事をしていたのは芝浦、石橋、そして真司達を裏切った手塚の3人だった。石橋が焼き上がったステーキを皿に乗せながらそう告げる中、テーブルでは手塚と芝浦が一足先にステーキを切って食べ始めていた。

「途中で邪魔が入らなければ、城戸達を全滅させられたのによお」

「……だが、奴等のデッキは奪った」

「良いねえ、生身の奴等をいたぶるのも！」

「ああ、悪くない」

しかし、真司と木村のカードデッキは手塚が持っている為、2人はライダーに変身できない。その為、この2人については生身の状態を遠慮なくいたぶる事ができる。どう

やっていたぶろうかという石橋の考えに手塚も賛同している中、芝浦は黙々とステーキを食べ続けていた。

「あ、ちよつと胡椒取ってくれ」

「ああ」

真司達をいたぶるのは先のお楽しみという事で、今は食事を存分に楽しむとしよう。そう考えた石橋は手塚に胡椒を取って欲しいと頼み、手塚もそれに応じて立ち上がり、石橋から離れた位置にある胡椒へと手を伸ばし始める。その間、石橋は目の前のステーキから漂って来る美味しそうな匂いに、早く食べたいと思いつつ胡椒を渡されるのを待ち続けた。

しかし、石橋が次に顔を上げたその瞬間……手塚から渡されたのは、胡椒ではなかった。

ドスウツ!!!

「——がつ!？」

手塚が石橋に渡した物、それは胡椒ではなくミートナイフだった。胡椒を取るフリをした手塚がミートナイフを勢い良く突き出し、その刃先が石橋の胸部に深々と突き刺さってしまった。いた。

「お、お前……ッ……!?」

石橋が苦しそうに呻く中、手塚は何事もなかったように椅子に座り、またステーキを切って食べ始めた。予想していなかったタイミングで裏切りに遭い、現状に理解が追いつかない石橋は、自身の隣に座っている芝浦に助けを求めようと、彼の服の袖を掴んだ。

「芝浦……ッ!!」

しかし……

「触んなよ」

「ぐっ……!?」

芝浦から返って来たのは拒絶だった。石橋の掴む手を振り払った芝浦は立ち上がり、手塚と同じようにミートナイフを石橋の胸部に突き刺し、そしてそれを力強く引き抜いた。石橋が椅子から地面に転げ落ちた後、芝浦は引き抜いたミートナイフに石橋の返り血が付いているのを無言で眺めてから、当たり前のように返り血が付いたミートナイフでステーキを切り始めた。

思わぬタイミングで2人から裏切られる羽目になってしまった石橋。地面に倒れた彼の体が粒子となって消滅していくその間も、芝浦と手塚は何の会話もなく黙々とステーキを食べ続ける。

そして食事を終えた後。

ある寝室にて、芝浦は上半身が裸の状態でベッドの布団に入り込み、手塚がベッドに来るのを待ち続けていた。そこにシャワーを浴び終えた手塚がバスローブ姿で現れ、芝浦の隣に入り込んだ彼はバスローブを脱ぎ、素肌を露わにしていく。

互いに上半身が裸になった2人は、無言で互いを見つめ合う。それから芝浦が手塚の前髪を掻き分けるかのように優しく触れた後、芝浦が手塚を抱き締めるように顔を近づけながら、ベッドに倒れ込む。

この間、2人は何も語らない。

そこにあるのは、極限の状況下で芽生えた禁断の愛。ただそれだけだった。

—— 仮面ライダーシザース、死亡。

残るライダーは、あと9人。

「——すまない、二宮。食事から何まで」

「気にしなくて良い。どうせ材料も余ってた事だしな」

「はあくお腹すいた〜!」

夕暮れ時。真司と蓮の2人と一旦別れた夏希はその後、二宮と自分が使っていた拠点へと戻り、そこで二宮、それから二宮に保護されていた木村と再会。話したい事は色々あるものの、まずは腹を満たすのが先だという事で、二宮はこの日の夕食としてお好み焼きを作っているところだった。

「にしても、今までずっと2人で過ごしてきたのか?」

「まあな。初日でたまたま一緒になって、それ以来2人で組むようになったところだ」

「食糧もいっぱい確保できたしねえ。おかげでご飯は困らない、寝床も困らない、ほんつと最高♪」

「そ、そうか。とにかく、本当に助かった。お前等が来てくれなかつたら、今頃俺は……」
「それはもうよせと言つてるだろ。こいつが飛び出して行かなきゃ、元々見捨てるつもりだった。礼を言われるような立場じゃない」

「けど、何だかんだで二宮もアタシのやる事に付き合つてくれるよね。ほんとかつこい
い♡♡」

「飯を食つてる時に突つくな、行儀の悪い」

(……仲が良いいんだな)

夏希がニコニコ笑顔を浮かべながら二宮の頬を突つつき、それを鬱陶しそうに手で払いのける二宮。その2人のやり取りを目の前で見せつけられた木村は、この日、信じていた味方に裏切られたばかりであるのもあって、どことなく複雑な気分であった。

「……それで、明日はどうするんだ?」

「城戸真司に、秋山蓮……白鳥がそいつ等と一緒に、浅倉威のところに向かう予定だ。俺はその間、芝浦に手塚……あと石橋だっけか? そいつ等の動向を探る。お前も、自分のデツキは手元にあつた方がまだ安心できるだろう?」

「あ、ああ……」

明日、二宮達はそれぞれ二手に分かれて行動するつもりだった。夏希は再び真司や蓮と合流し、過去を全て覚えていたという浅倉の元を訪ね、その間に二宮は木村と共に芝浦達の動向を探り、隙があれば真司と木村のカードデッキも取り返す。何故そこまで自分に親切にしてくれるのか、木村は少なからず疑問に思っていた。

「俺達を信用できないか？」

「……すまない」

「あれ、ひよつとしてアタシ達疑われてる？　なんかそれちよつと傷つくなあ……まあ、無理もないか。実際裏切りに遭ってた訳だし」

「だがどちらにせよ、お前には俺達に付いて回る以外の道はないぞ。デッキもなしにこのミラーワールドをうろつこうなんざ、自殺行為も良いところだからな」

ライダーがカードデッキもなしにミラーワールド内をうろつくなど、他のライダーやモンスター達からすれば美味しい獲物である。流石にそれほどのリスクを背負うような無謀な真似はできない為、二宮の言う通り、木村は2人に付いて行く事しかできないのが現状だった。

「とにかく今は、さっさと飯を食って体を休める事だけ考えろ。俺の勘が正しければ、明日はかなり忙しい1日になるかもしれない」

「は……あ、二宮。その鯉節取って」

「この距離なら自分で取れるだろ……ちなみに青のりはいらんのか？」

「いらぬ。歯に付いたら取りにくくて嫌だもん……あ、二宮になら舐めて取って貰うのも悪くないかなあ〜？」

「ぶふっ……!？」

「どっちにしろ取り辛いだろ。まあ別に無理して青のりかけるとは言わんが」

「ふうん、なあんだ」

「……何でちよつと残念そうなんだよ」

「べつつにいい？ フフフ♪」

(……俺は一体何を見せつけられてるんだ)

夏希のトンデモ発言に、思わずむせそうになる木村。その後も食事が終わるまでの間、木村は二宮と夏希の甘ったるい空気を醸し出した会話を間近で長々と聞かされる羽目になり、しばらく謎の苛立ちを感じていたという。

それから数時間後。

一足先に休む事にした木村は、リビングルームのソファで毛布に包まりながら就寝していた。その一方、2階の寝室で休む事になった二宮と夏希だが、この2人はまだ眠りについていない。この日、せっかくの時間が台無しにされた事を思い出した夏希は、自分から二宮をベッドに誘った後、彼との熱い快楽の時間を過ごしていた。

「はあ、はあ………ツ………どうだった？」

「ツ………ああ、悪くない」

ベッドに仰向けの状態で寝転がっている二宮と、その二宮の上に跨るように座っている夏希。着ていた衣服を全て脱ぎ捨て、ひたすら行為を繰り返し続けた事から、両者共に呼吸は荒く、全身も汗だくだった。流石に疲れが溜まったからか、夏希は額の汗を拭ってから二宮の隣に倒れ込む。

「ん………二宮の匂いがする」

「どうした、変態みたいな事を言い出して」

「いや、アンタがそれ言っちゃう？ ……不安なんだよ、正直」

二宮の腕に両腕を回し、自身の胸を押し付けるように密着する夏希。二宮は自身の腕

に押し付けられた夏希の胸から、彼女の鼓動を感じ取った。

「ライダーが死ぬところなんて、初めて見たからさ……」

「……ああ」

石田がエビルドライバーに喰い殺される光景。

戸塚が粒子となって消滅していく光景。

今日だけで2人もライダーの死を目撃した事から、夏希は今まで以上に死への恐怖心が強くなっていった。故に、彼女は二宮との行為に強く没頭した。自分達はまだ生きている。それを確かめる為に、ひたすら二宮と愛し合った。

「明日も、またライダーが死ぬんだよな」

「まあ、そうなるだろうなあ」

「ねえ、二宮……」

「俺の答えなら、もう何度も聞いただろう？」

「……うん、そうだったな」

もはやこれ以上の問答は不要。そう考えた夏希と二宮は再び唇を合わせ、両腕を回し強く抱き締め合う。それから二宮の胸元に顔を埋めた夏希もまた、二宮の鼓動を強く感じ取る。

こんな時間が、これからもずっと続いていけば良いのに。

彼女が胸の中に抱いた切なる願い。

その想いが、儚くも崩れ去る事になるなど……この時の夏希は、まだ知りようがなかった。

ちなみに……

（——たく、やっと静かになったか）

天井から聞こえて来るベッドの軋む音、2人が快樂に没頭している声などから、2階の寢室で何が行われているのか容易に察してしまった木村。

おかげで彼はその夜、1人悶々とした時間を過ごさなければならなくなり、朝起きたら少し強めに殴ってやろうかと物騒な事まで考え始めたのはここだけの話である。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
: